

436
5
357

美人情
朝顏
日記

092765-000-2

特13-17

朝顏日記

日吉堂

M23

DBQ-0047



W2/438/23



美人情朝顔日記叙

朝顔日記は始め浪花の狂言作者司馬徳段が起稿な
 時深雪の役を扮すべき且なかりければ其儘に打過
 を近松柳が首尾を増補し一部の柳史と比なじき之を歌
 舞伎に創めて演たるは二代目田之助曙山にて採り脚色
 生寫朝顔話と題したるは文政十年山田素山子と竹本重太
 夫の作なりとぞ然して卷中の生なる駒澤次郎左衛門と稱
 するは其實熊澤了海にて了海は通稱を次郎八と云ひ善山
 先生と諡せらる筆よ塔ふ朝がほの露のひぬ間の文章の艶
 は恐れ入谷の藁駄家も三舎を避る手際といふべし

庚寅彌生上旬

菅乃家主入記





秋月弓之助の
娘深雪
落魄して
朝顔の
誓女と
呼ぶ



菊池家の浪士
宮城阿蘇次郎
后
駒澤治郎左衛門
春雄

持13
17

美人談朝顔日記

○第一回



朝顔は朝よく咲かへて盛久しき花にぞありける此葵につけていと目出度もの語わりけ
 る其初め肥後國に宮城廉助春彰といふ者あり代々國司菊地殿に仕へて四百石餘の知行を給
 朝はり數多の家來を扶持し男女の子實にさへ富て何不足なき暮なり此廉助至極篤實の生れな
 る上は博學の譽あるに依つて主君菊地殿の御心に協ひいち早く御見出ありて儒學教授の職
 を司しめ給ふ夫より廉助は日毎に學校に行き歸つては一番の子供に指南せり倍此宮城の屋
 敷菊地川の邊にあり此菊地川は巽の方の山より落あふ大川にて逆まく水は濁をなし猛瀬
 蚊蟻も住べしと覺えて物凄じき勢なり後ろの名たる阿蘇が嶽高く聳へて頂より火焰自然
 と燃上り黒烟たつて中天を焦し時わりて泥を降し岩を飛ぶ熊鷹もこれが爲より怖れ崖根
 も是を見ては隠れ伏す周囲の岩壁は恰も削たるが如く雲樹はいやが上より重なり其高さ幾千
 仞といふを知らず是を仰げば身の毛もよぶつ斗の大峰なり薩摩の霧島豊前の英彦なんど世
 に聞けたれども阿蘇は鎮西第一の名山よて盤巽またいやちこなり先年征西將軍の宮良俊
 親王南帝の勅を受けて大明と好を結び給ひしより通門の使者往來絶す其頃明の永樂皇帝より
 彼山を封じて鎮國壽安の山とあがめ給ふとかや古き文に深山大澤龍蛇を産と記して名山大
 川の秀氣集り凝る時は極めて英雄豪傑を生ずる所と思はれたり爰に宮城廉助が妻若江と呼
 五べるものは宮司何某が妹よて婦人ながらも其の心雄々しく常夫が經史を講ずるを聞いか

六、感ずる所やありけん一の大願を起しおくれたる望なれども天下國家を利益すべき一奇見を授け給はれど阿蘇権現を願奉り朝なく垢離をかき東を望て伏拜み只管實をこらして祈ければ夫廉介五十を過るの身四十の坂を登り斗らず只ならぬ身となりける流石は儒者の妻よしわれは胎教といふ事を守りていはた帯の月よりは益々身の行ひを慎み眠ある時は幼き者どもを膝元へ集へて忠孝の道を説聞せけるかくて若江ははや産月を過せども産落すべからず景色もあらねば其身は更なり親族までも怪み且あやむ兎角して一月二月は夢の間に過行すで二十五ヶ月にぞなりける若江はほどく鬼子をも孕みしかど安き心もなかりけるに其年の暮大晦日の夕刻に至り若江は不斗産の氣つきけるにぞおはてふためき取わけ婆よ安産薬よと騒ぎ暫く有て頸に惱みけるよぞ夫廉介は藥何くれと差圖し柱よもたれつと思はず打眠りぬ其時誰とはしらす山の神天下りまると叫ぶ聲に驚き見れば一朶の白雲に乗たる一員の金甲神出現ましまを其威權わたりを拂つて見ゆければ廉介驚きしさつて席に頼つて畏みけるが忽ち襖のあなより初聲高く揚たるが赤子に似合口大音なり折から時計も鳴り響けば五更とおぼしく人々さゝめきていと賑かなり覺ゆず頭を擧げて見廻せば山神の失給ひて初鳥家のうちよしはななくにぞつと起て障子開けば東の空はがらかと明方の氣色はみやをら一輪嫩江登りて御嶽の頂を放れ一筋の白氣たなびき嶽の麓に連りて絶ざるは不思議なりける有様なり此曉誰いふとなく宮城の屋敷より柱の白氣立のぼり折ふし赤子の泣聲聞し只事ならずいかさま是は神の授け給ふ子の産れし故なるべしと此近邊の里人いひあへりしとを頼て年がましき乳母赤子を襦袢に包み抱き來り主廉介よ見せければ廉介悦びて見れ

ば産毛は艶々しくのび玉を欺く嬰兒なるが眼さやのはづれたるさまよも唯ものとは見ゆず殊に山神の靈異といひ後々は御用にも立べきものならんと未頼母しくぞ思ひける斯る悦びにめで、彼御嶽よかたどりて幼名を阿蘇松と名づけこよなく寵愛しみ育てけるよ鸞鳳は卵のうちより盛衆鳥に優れ梅檀は二葉より香氣諸本に勝の譬への如く阿蘇松はまた乳放れのせぬ頃より一を聞て万を知るの奇才ありて卓量衆に優れければ神童の聞の高くして十一才の時大守菊地殿より召出され初て御目通りをなしける菊地左馬頭殿熱々是を御覽じ給ふに其容顔のあでやかなるさま露を含める花よ優り玉よ均まわたりも輝くばかりなれば菊地殿近く召れ阿蘇松といふ汝よな詩作なんどもなせるよし今此庭の趣を即興よ仕つれと仰せける阿蘇松ひれふして上意を畏み聊悪びれたる氣色もなく立所に五言の絶句を作り揚袖打掛けて雪なく玉腕を廻らしつゝ「さらさら」と書了りて是を捧ぐ其字体とて龍蛇の如く墨付いと句やかなれば大守御威斜ならず當座に貳百石の新地を下され紅梅組の列に加へさせ給ふ是より阿蘇松は直に御殿に止まりて影日向なく奉公をを願みける此紅梅組といふ譯は菊地記殿は深く儒道を重んぜられ賢明類なく一個の良臣吉弘市正といふ者をわけ用ひて執事と成し給ふ吉弘の忠直の人にて寛嚴程よき政事よ依て領分治り國民都て大守の仁徳を仰ぎける此君常に風流を好ませたまひ御物好のあまり美麗すぐれたる小性を撰み紅ひの美服を着せ御側まはり召仕はせ給ふ是を見る人其出たらの花美なるを褒め紅梅組と稱せしよりいとどなく紅梅と云習はせしと不此組の頭取は荒尾虎福とて當家の一老荒尾彌左衛門が次男なり七り父が權威あるに任日頃我意よ誇り人もなげよと振舞けり去よ新參の宮城阿蘇松が君の恩

八籠を装り頻に出頭するをろねみ朋輩をもと常にあてこすり云ふて嘲弄せしかど阿蘇松は生れ得て大人しき生質なれば益々謙遜りていつも逆らふ事なれば彼いぢわるの仲間をも詮術なくてやみぬ(此後三四年の間話しなす)斯て後阿蘇松十五才荒尾虎嶺十八才よりける春當屋敷の御先祖武徳院殿の御遠忌に當れり是よりつて御菩提所水禪寺に於て三夜の大法會を設けられ祖君冥福のため水陸施餓鬼を修せしめられて其前後三日の間内殺生を禁じ又青錢米などを施行ありて貧民を賑はしめ給ふ當日は三月十八日とぞ開ける抑是寧一山の開基にして代々唐より高僧渡來して住持せられ古延慶元年開山一和尚國守の招待に應じて下向あり當國第一の風水よき地を見立一座のみつ林ふかき山元を伐り開き土木の工を盡して草創ありける大伽藍之宮殿樓閣立ついさ金壁輝き山門の額は皓月山の三大字よて南帝後龜山院の靈翰なり後ろの方の切岸よりは一筋の瀧水みなさり落ち中程なる岩角よわたりて露を放てば恰も龍の玉を争ふかどあやまたる其渡り都て瀧山吹咲亂れたり客殿の横はおはし間の砌まで彼流れを引入れて大きな池をなせり澄きりたる水は鏡をのべたるが如く五直の垢を洗ふに堪たり是に影うつせば身の毛も數へつべし水泉の名空しからず清淨なる事云ふに堪たりかくて其日になりければ菊地左馬頭武頼朝臣參詣あり御供は大半惣門の下馬に殘され御側の者共を供して大雄寶殿より上らせ給ふ御部屋雲井の方には腰もとにかしづかれ女中達は都て白装束をぞさせ給ひけるは大切なる御法の場なる故かたしは白一對に佳人美少年等の御供なれば人々我を忘れて懇てけり知客寮こは布施香

朝

顔

日

記

○第二一回

奠の類をならべ庫裏の方には米俵山の如く積置けり本堂の中央なる須彌壇には從四位拾遺補闕武徳院殿叙阿大禪門と書たる靈牌を設け七寶の臺には至青銅の瓶子に一枝の金花を挿めり香爐は御雜を注し銀燭青焰を吐き百味の山海陳異を盡したり住持遠惠の長老は恩賜の紫衣を着し孔雀の袈裟と斜に纏ひ數多の僧侶を卒て珊瑚の珠數を指りつゝ恭しく靈牌に向て讀經の聲いと殊勝なり此時左右に立並びたる弟子たち種々の具を鳴して法樂をうらすに朝ぞさしもに廣き殿上もひつろりと静まりて濟渡り天人も花を降すかと思はれ徐に憐を催しけり

顔

日

記

優美を盡し御法會は時を遷して形の如く整ひ終りぬ此時鐘はるんくと響きて鼓は響々と鳴わたりけるよぞはや日中とぞ知れける菊地殿は知遠長老の誘ひにつきて書院の上段に座し燕々見渡し給へば客殿の作り様の更なり庭の砂子も玉を研きたらん様なるに池は鏡の如く長閑な霞渡りて又灰かななる梢どもの騒々しき頃なるよいと氣色ばみて撥たはれる櫻花の枝もたはむばかりと咲亂れ吹風よえならず匂ひ驚さううていはん風情有て今や散も初めず咲も残らずいと奥床しく見ぬにけり菊地殿一座を急度見渡し給ひ香爐峰の雪は如何と仰せけるに御側近き群臣誰あつて御意を解る者なく各々顔見合せ居たりけるに菊地殿いと不興氣にて御聲高く香爐峰の雪はいかんと仰けるを遠侍に在ける御小性宮城阿蘇松は上意を聞き姑く御前の様子を伺ひしが人々矢張もとの如く默然として一言の御答申上るものもな九し阿蘇松はいともどかしく思ひて其儘つと立て茶道風也をよび和主早く御目障なるあの塵

十を高くと巻上らるべしと呷やきぬ風也心得て其儘膝行ればしまへ至り凡其間三四間斗り
を取除けば忽地夜の明たるが如く晴やかに咲亂れたる櫻の梢をかぎりなごりなく見
て今一入の興を添させ給ふ菊地殿初め藤を隔て御透見せられし程は何とやらん水月の
御心地よていと詠め憂く思しけるに今阿蘇松がいち早く御付簾を卷せし其才智の賢しきを
御感賞ありけり長老も思はず如意を以て膝を打ち扱々宮城氏の子は希代の才人かなと類に
朝賞賛して止されども猶坐中よは未だ其意を得ざるやうすにぞ長老御前よ向ひ君しるしめす
如く唐の白樂天が高爐峰の雪は簾を掲げて見るといふ絶唱あり天朝にては何れの天子の御
時よか雪のいと高く降けるの殿に出御ありて今の如く香爐峰の雪は如何と詔ありけるに
玉座よ侍さける公卿達いまだ天意を得ずして暫したゆみ給ふ折しも官女清少納言いらはや
く立て簾を掲上られし故事と符節を合せたる頓智なり夫は女流是は少人今むかしとはか
れども諸とも其寸妙なりと例しを引て譽ければ殿は益御氣色麗はしく其儘阿蘇松を近く
召されいみじくもでかしたりとの上意にて差添の御刀を御手づから賜りて渠が發明を賞
記し給ふ是よ依て阿蘇松は圖らず面目をほこしけるされば此事を聞傳へて御供先の内より
は見性溜り來りて阿蘇松よ逢ひ悦びを述る人も多かりける常よ我意を振舞ひける荒尾虎松
をばじめ傍輩共は是が爲にけをされて各色を失ひしやとていと手持無沙汰と黙して
予のみ居たりけり彼荒尾虎松は素より腹あしき人にて日頃阿蘇松と睦しからぬうへ今も
不計上首尾と出かし拜領物せしなんとどいと誇り顔なるあの面つきころ胸悪けれどたまり
兼て傍輩に向ひ先程君の御意に香爐峰の雪は如何と仰せしは禪家の問答といふものなるを

阿蘇松ぬし誤り心得てみそを卷せられしはまぐれ當りぢうを我君にも出かせりどて下され
物は何事ぞ彼清女が簾を巻上しは雪にて詩の意も協へり今日の御前は花なり樂天の詩よ
も香爐峰花とは云はず斯る間違にてしかせしは申さば鹿相といふものなり夫がもつけの幸
となり不意に首尾せしは察する所方丈には龍湯の下心ありし故迂濶に執なし申されしや
を悦ばせたる者なり惣じて刀を下さるゝは一番鎗か一番乗の時にこそ有べけれど但し外よ思
朝召もある事かざるを已が分際をも辨へず御辭退申べきも知らぬうつけ者何は免もあれ雪と
花とさへ分らぬ文盲の程片腹いたしと苦笑をなせば外の小性共も執嫉ねもふ折柄にて口々
にさみなじるにぞ阿蘇松はいと打耻らひつゝはどく汗あへる心地牛の角目ごちて我上
よりおこり天に均しき主君を惡ざまに罵りけるはあらもつたいなしとづかくと進出で虎
橋殿の仰せ一を知て未だ其二を知らずと云ものなり如何となれば凡風流の道は詩にも歌よ
も雪を花になぞらへ花を雪よどりなしてころ幽言なる風流ども承はりつれ一々其例を引
言んよは其數限り有べからず只其一二を擧んよ去歲荆南梅雪よ似たり今年荆木雪梅の如し
記さくら散る木の下風は寒からし空にしられぬ雪は降ける雪花を花とはあまり成唯俗言にて
いづくに面白みの味の侍るや如何とといひければ流石の虎橋も一句の下に言込られ覺
ず赤めし其顔は猿の尻にさも似たり素より此座敷は奥まりたる所なれば斯口論に及ど雖も
別間には知れざりけり荒尾虎松は怒心頭よりおこり烈火の如く憤り如何にもしてさやつが
落度を見顯し喧嘩を仕掛したゝか打擲して此無念を晴さんと色々もくろみ立戻りけるが不
一斗阿蘇松が刀の置所法にはづれ差出たるを見て其所を行過るふりして阿蘇松が刀を足に任

二十せて蹴散せばがらりとまろび来るに外の小性は又手を出してこね飛ばせば壁に當りてがたり
と音す人々手を敲てとつと笑ふ阿蘇松はあはを是を取て押頂き是は拜領の刀なり已等生置
べきやと心よ思へども態と面を和げ齒牙に懸べき体もなければ虎桶は増長じて我今斯迄無
禮をするに立あがりて敵對せぬは此虎桶が怖しいか何よもせよ大たむけの奴なりと飽まで
辱しめげれども阿蘇松は雙の如く聊も取合ねば虎桶益々あなどり己は腐れ儒者の倅なり何
ぞ我に向ひ手むかひせん其生白けたるしやつらどは乗も合すと扇子逆手に持阿蘇松が腮
へあて、仰向にふつと唾を吐掛しは言語同斷の狼藉なれども阿蘇松は爰ぞ一生懸命の時な
れ御供先を騒し私に身を果さば屍のうへの恥を殘さん兎にも角にも堪忍をするにしかずと
胸の怒を押静め虎桶殿こは餘りなる雑言かな無禮も場所によるべし御供先なりあどは御遠
慮あるべしと鼻紙を出して唾を拭ひしはいと大人しき振舞なり虎桶は呆れ實に能々の者な
り己が卑怯を蔽はんとて事よかこつけ愈見くびりやれ阿蘇松御供先は和主と習はんや斯
る殿堂にて是程までに厭辱を受口惜ども思はず我無禮を答ぬは沙汰の限のべらばうめ女の
記 腐たるにも劣れり夫よ何ぞや日頃汝が父廉助は凡武士たるもの平常は文武に身を治め事あ
つては君の馬前まで大敵を打ちしき筋骨を盡んよは藝ころ肝要なれと常は法法術を修る
よし聞と見るとは裏表今此倅か憶病を見れば廉助とてもたかの知れた木の葉武者敵を見る
時は身を振ひ一番に逃走るは必定なり武士の風上よも置れぬ奴にて謀盗人ども云べしと出
放題なる悪口よたまりかね阿蘇松は堪忍袋の緒をさらし先の方より御座近を揮り言せて置
ば附あがり無禮の段々武士の魂足に掛け刺へ人の面を巻として恐れ多くも君をさもし父に

は種々の悪名をつけし條人而獸心の國賊めと思ふさまに馬返し最早開捨ては一分立す弓矢
八幡ゆるすまじい尋常に勝負せよと飛ひさつて身構へせしがや上待虎桶汝を今爰まで打
果さば大切の御法事といひ清淨の道場に血を落さんば恐れあり互に死しても不忠の遺恨
を明日壺井の松原にて潔く勝負を決し手並の程を見すべしと言ければ虎桶からくど打笑
ひ阿蘇松汝此場を言拔け今宵のうちよ逐電せんどの下心其手は喰ぬぞ賢の武士の刀の味一
朝 太刀うけて試よと刀すらりと抜放し踊上りて阿蘇松が眞甲目がけてから竹割と切付たり既
にやはやと見ぬたるが阿蘇松飛鳥の如くに身を替し扇子を以て丁と打ば刀はばらりと落た
りけり並居る小性原は虎桶に荷擔し阿蘇松を中へ取込返連て八方より打て懸る阿蘇松透さ
ず落たる刀取る手も見せず虎桶が短刀にて打向ふと飛連へて虎桶を大勢凌ぐ切放せば鮮血
顔 さつとはどはしりて紅梅の花を散せる如くなり此騒動は大方ならず其内人々集り來り矢庭
に阿蘇松を引据血刀もぎどり屏風にて取巻嚴重に警固をなし亂れ騒ぎける小性共を悉く取
おさへけり菊地殿死由を聞き召て大に驚かせ給ひ其儘阿蘇松を目附役に預けられ事の次第
記 を糺し給ふ殿には斯る珍事の出来しかば饗膳未だ央ならざるに急はしく供ぶれを傳へ歸駕
をうながし給ひける

○第三二回

三十 明らかなる月は浮雲の爲に光を失ひ色めく花は狂風よ香を空うす美玉の欠安く甘泉は盡や
すし去程に勘密役の人々は荒尾虎桶宮城阿蘇松乃傷の一件逐一に吟味を遂げ口唇を書せて
家老吉弘市正は差出し猶詳に事の様子を述て其裁判を待ける吉弘は俄かに裁許なし兼熟

四十

々と思ひ廻すに初め虎橋より仕掛たる喧嘩にて殊に種々の雑言を吐き利さへ上の事までも申せし條家老の嫡子に似氣なき振舞去と今其人死せし上は別罪を問ふべき由もなく又阿蘇松は尤止事を得ずして討果せし譯なれば其罪輕きに似たれども同役を切害せし事明白なり併し古き式目に依て喧嘩兩成敗とし阿蘇松をば武法に任せて切腹せしめんには然らば公なる沙汰ならん然なりと分別して次の朝出役し君に見て申上げるは昨十八日御菩提所の御法事に於て荒尾虎橋宮城阿蘇松刃傷の義糾明仕り律例吟味仕りし處しかく定法と均しくいへば虎橋の死骸は其父彌平左衛門へ下され葬式を許し又阿蘇松は古例の如く切腹仰付られて然るべくいはんがと伺ひける左馬頭殿是を聞召れ忽御氣色變りて御眼尻いとするをく見ぬさせ給ひ市正がいまだ言果さるよつと立て奥深く駈入給ふ市正此有様を見らるより呆れ果せばし口を開かず是全く君の御心よ叶はず阿蘇松を助け度思召ゆゑなりと推しける故元來忠直の人なれば我裁判の未熟なる事を知り且恥恐れ其儘御殿を罷出で我家へ歸てはどく寝食を安んぜず様々案じ煩ひけるが何れ君の御内意を伺ひ見んと度々出仕を記なせども取繼の用人どもいつも御不例しとのみ言つぎて御逢なし是に依て手續のものをして數多の帳面を繰らせ其例やあると穿鑿すれども別に異儀もなければ市正益困じ左さま右さま肝膽を惱まし齒をさへ傷る斗りなり此終夜眠られず獨り燈火を掲げて明るを待けるが不斗一手段を思ひ付たり夫は御部屋雲井の方には世に勝れたる伶俐の性なれば是をたよりて内証より君の思召を伺ひ聞んど筋廣敷し手藝を求めて其事を言込懇願ければ御部屋よも快くうけが心費し豫じめ設け置れし美酒佳肴は更なり吹彈の興をさへ散させ給ふ

四十

御機嫌うるはしき折柄過し頃小性共の事ありしが相手阿蘇松は如何なる御仕置に行はせ給ひしと何氣なくうちとひ給ふ殿召召されれば未だ何とも家老どもより申出すと斗り仰てまた餘のれ話し遷りてやみぬ夫より君ならせ給ふ毎に雲井の方折に觸て此事を伺ひ給へばいつも同じれ答へなりき或夜雲井の方君に向はせ給ひて妾不斗思ひ出せし事の侍る妾の里はしろしめす如く豊後の府内にて侍るが未だ幼なきときよて國司大友右近將監様の近習を勤めし高階源藏と云者のいひしが丁度今度の如く互に意氣地の口論より此源藏は相手の一人を切殺し三人に疵付しを廻りの役人召捕て譯を委しく糾明せし處元來源藏は二ツなき忠臣にて私なく仕へける故彼佞人ども君の御前宜敷を妬み下城の道に待伏して不意討よせんとして却て彼が爲に討れしと云事明かなるにより國主の御裁判には彼源藏は百兩の首代を出させ是を吊料として死せしもの、妻子に下され其餘の者共は叱にて相濟侍りぬと物語りければ菊地殿聞召のたまふやう其判断未だ宜きに協ふとはいふべからず喧嘩兩成敗と云事古へよりの式法にあらずやと雲井の方膝を進めて左には其源藏へは切腹仰付らるゝか殿御頭を振せ給ひいやく御事の申さるゝ通りなれば其源藏とやらん誠忠無二の者と忠臣を欺討よせんとせし悪黨等と同一と捌きなば主人は事し暗しと世に誘れ臣たる者はを見て以來忠義を勵む者あらじ雲井の方彌々怪しみ左あらば源藏を助けては御政道に協るゝや殿然らず初めよも云ふ如く助ては國法立難し予が思ふは其源藏とやらんを勘當して領内を構ひ追放せしめ死者の名跡を立遣し荷擔の者等は吃度叱りて改むべし利解を加へすま五させん斯せば大抵寛仁の制度たるべし雲井の方御意を聞て陰に悦び又四方山の御語らひに

六十

成て其夜は分て帳内もしめやかなりしとぞ吉弘市正は雲井の方より御内意を傳聞悦ぶ事限
りなし斯て市正翌日出仕し御目通を願ひければ早速御召出し有ける市正御部屋の内意を合
みて宮城阿蘇松追放の事を伺ひ奉れば殿安々御開濟有せられ然計らへどの御定なる市正謹
で其儘此由を役筋へ申渡しぬ市正は偏は雲井の方の御蔭なりと忝なく思ひ又其發朋を感じ
ける其後菊地殿御部屋へ入せられ御機嫌能く雲井彼阿蘇松は永の暇を取せ追放せしむ前の
日御事が虚咄よく出来たりと仰せられけるとぞ扱菊地殿如何なれば斯まで阿蘇松を助けた
く思召てと其奥意を委しく尋ねれば是ころ深き子細あり是より以前菊地殿水禪寺の長老と
招せられ密に仰られ近臣共の相を見せしめ給ふに長老一々見て言やう何れとも骨法世の常
に在り其中は宮城阿蘇松の希代の神相にて其生立頼母しく彼は王佐の才を具したる人傑に
て後には世を救ひ天下の司法となるべき者なり去とも惜むべし一個の欠歎ありて十四五才
の時不意に災あり一命も保ち難からん此大難をだに免れなば彼が功名成就すべしと密に沙
汰をぞせられける菊地殿然あらば如何して助けべし長老拂子を取直し天氣洩すべからずと
配不答へける菊地殿此時長老の言葉を覺ゆる居給ひて年頃試し見給ふに近臣等が身の上の吉凶
違はずして符節を合せるが如くなり素より然あるべき筈は彼長老と云は震旦國楊子江なる
金山寺にて修練せられし高僧にて風を見ること類なく人の禍福を指す事見通が如く是によ
つて菊地殿は此度の事起りし時彼が年丁度十五才なる故長老風鑑その驗し有事神の如しと
感じ給ひ世の利益の爲を思召斯様して助けとらせ給ひしは依怙なき所明白にて私に其徳果
を貪り給ぬ証據は此計にて測知るべし才に至りて阿蘇松は駒澤何某と呼れ非常の功を立其

七十

名を海内に振ひし時菊地殿はじめ市正は斯と明させ給ひしとぞ先の夜雲井の方へ仰られ
し御言葉といひ類なき賢明の君なり彼虎豹の子の未だ文をなさずと雖もはや牛を喰ふの光
あり去ば目付役も召仕れ置れたる宮城阿蘇松は斯人を殺せし上は生延んとは思はねども大
罪を犯せし身の私に死路を求るは上への恐れ早く御下知を待て罪に所せらるべしと疾より
警を拂ひ最期の観念擧ぐず見えにけり斯る所に上使入來りて君の仰を感へ追放仰付らる
旨申渡せば直に追放の足輕共丸腰の阿蘇松を引立たり阿蘇松は思も寄らず辛き命を助り御
役所をぞ立出ける心なき行かひの人も此有様を見て哀を催しけり斯て阿蘇松は行事十町餘
りよまて官橋の上より遙く御殿の藁を望んで拜をなし君の大神を謝し奉り正しく再生の父
母なりと難有涙せきあへず此期も及びても父母もだ一目逢ましく思へども叶ぬ事なれ實
に武士の身の上程悲きものあらじと只女々しくも鼻うちかみ彼三閭大夫が澤邊に徘徊心地
にて程なく菊地殿の城下を放れる東の町はづれなる一里塚を限れる例にや營固の足輕共
は援より阿蘇松を放ちて歸りぬ阿蘇松は屠所の羊のれもひをなし徐々どたりつゝ頓て道
の邊の行當りに近付と見れば右手なる森の杉間より一筋の茶の烟立なびきていと物さびた
る古き社あり此内よりばらりと立出て阿蘇松を引止め別れを惜める輩は日頃親たる者に
て先の程より集ひ居て首途を見送るよぞ有ける去と骨肉の者共は上を憚りて來らざるなり
阿蘇松は人々に請れて茶店に腰打掛け別れの盃を酌かはず程なれればせに馳付たる從者
が差出せる花布の風呂敷はとさ拾打着て旅装ひをなし差替を佩て目せき笠を左に持ちはや
別を告て打立は各涙に袂を絞りける夫より阿蘇松は東を差てたどりけるが御獄は道の序と

朝

日

記

八十 いひ請願もあれば詣ばやと嶮しき葛籠折を登り凡籠より半腹までは霞霧なく古木立込て所々山櫻うち交り花ははや過て名残り霧める若葉の梢あさ緑深谷はどろどろと岩ふれ水鳴音激く石の鳥居は幾個か越來つ常夜燈も流石に船々たり頼て社に詣で廣前の砂地に頼づき禮拜してろこら徘徊しけるが列の詩のうかみ出る儘に腰に差たる矢立取出し短き筆と書付ぬ爰の大宮司は續合なれば尋到るに卯の花の垣根に遊ぶ童の阿蘇松と見知たるか一目見るより駈入て是を知すれば宮司忙はしく出迎ひて座敷に請じ家内打寄り聲懸しける積る話に其夜は更て漸く臥戸に入れば短夜の習ひ早くも山鳥の啼渡るに夢さへ結ばず朝まだきに起出て彌なを嘔り終り旅装ひし暇を告て立出れば宮司が家族ども立出て引留む阿蘇松は厚意忝なくはあなれども御勘當の身上なれば一夜と雖も御座近邊に長居せんは恐なきに非ずと固辭けるも皆々も實に尤と思へば強ても止めず專を別れを惜みけり斯て阿蘇松は宮司が宿を立出て夜は既に明放れたれど木立深き奥山なればまだはの暗き雲の透間の星明りに透し見て路を下りてとある岩角に立て老木の隙より見下せば有明月の落かたに菊地の城と覺しく白壁の園に見ゆるに父母の在所は彼なるかと伏拜み是より先は山又た山にわけ入る是ぞ我故郷の見納めなれと徐に胸を斷つ思ひせり剩へ足元より山時鳥の啼たつにぞいと哀れを添て眼をしばたゝき時鳥は歸るに如かずとなくものを我は罪あり退放の歸るよしなき身の上を悔み泣つ、血の泪を流しける夫より又八重に隔たる山河を越つ、行けるに程なく豊後國鶴崎と云處に至れり此湊より便船に打乗道とがら障なく日ならずして周防の國松の浦に予着にける

○第四回

大内家は琳聖太子以來連綿とつゞき繁榮類ひなく武威を振ひけるが當主大内新助多々瓦瀧直殿御代に至りては既數ヶ國を領し室町家の命に依て西海道の探題となれど當家の儒臣に駒澤了庵と云者あり彼は肥後の藩中宮城廉助が弟なり廉助が八男阿蘇松が爲りは現在の叔父なるに依て阿蘇松は是をたより城下より來り頼て駒澤が屋敷に等ね行り初めて對面なし朝其身の始末を明白に話して身の落付を頼ければ叔父了庵素より骨肉の事なれば一義にも及ばず快く肯ひて止め置けり此了庵先生と云るは山陽山陰の間より於て名たゝる儒者にて博學強氣にして經濟の度量又類なれば大内殿も用ひられて政務の相談役を言付給ふ受業の門弟は日毎に門下市をなす爰に集ひて學問を屬みける去程に宮城阿蘇松は此家にかゝり居て晝夜出精し書を讀で暫時も怠らす素より天賜の英智あれば益雪の功つみて俄に五ヶ年が間一學問成就し今年十八歳になりける其如月の初め元服して宮城阿蘇大則紀春雄と名乗りぬ斯男となるに付て青雪の思ひやるかたなくいさ一先京鎌倉へ赴き仕官せんと折を見て叔父了庵に向ひ遊學の爲都へ上りたき望あり當分の暇を給はるべしと述べれば了庵首を振りて是を止め都はよろづ花廳にて少年輕薄のまじらひ好ざる所なり又ころ折もあらぬ種々にすかし拵て彼が望を拒みけるに深き所存のある故あり了庵もと一子群一といふものあればも放蕩にして父が戒を用ひざれば遂に堪當り及びしが外に子とてはあらざればいと便なく思ひし折柄不圖阿蘇次郎が尋來りし其さかしき才あるを愛し是を養子となし我家督を繼せんと思ひ立彼が振舞を見るに其志望の大なるを推せし故今なまじひよ手放さば再び

十二

歸り来るまじと思ひて引止めたるなり事にさとき阿蘇次郎早く此景色を見て取り我はじめ
國を出し日より御直參ならで仕へま志をたてしものなり駒澤家五百石の知行を望む
所にあらすど一通れ書置を殘し其夜間にまされて了庵が家を忍び出ゆきく惱ぬあしびき
の山口の方も遙の跡に見なしたつたどりて日を重ね漸く難波の都に至り聞及べる住吉
天王寺なんどあらかた拜み回り夫より北を差て長柄川を打渡り山さきの海道を経て西嵯峨
に入り名所古跡を探りつゝ名たる嵐山の麓に來て見れば峰々の形は彩色の金屏をつらね
しかど疑はれ下り水は瑠璃をなして美事なり此方彼方又霞あひたる梢ともは錦を引渡せる
如く數限りなき櫻のはや十二分に咲亂れて山も堆もれたる斗り頃しも彌生の十日あまりな
れば空の麗かなる人の心も延やうよて物思はしき折なる故川添の景色鳥の聲も心地よげな
り此時人々雲の如く出さかり所せまじと打集ひ所々に慕引廻し唄ひつ舞ひつおのが隨意遊
び戯ふれる中じやんことなき徳方の御遊よやたな、舟料さ、せて蘇竹をしらべ給へる
其聲妙に澄渡りて幽雅なる事いふ斗りなし

記

舟うけて誰もの音に遊ぶらん嵐の山の花の木隠れ
と三篇打吟じける其時誰と知らず後より袖をとらへて今吟せられしは足下の詠まれたる
和歌なるやといふに阿蘇次郎つと振向て是を見れば頭は唐帽巾を頂き身に黒染の衣を着た
る殊勝氣なる禪僧と見るよも恭ましく腰を屈めて如何にも某が詠みたるなり彼禪僧打點頭づ
き足下の大姓高名はいかん阿蘇次郎答へてそれがしは宮城阿蘇次郎春雄といへる浪人なり
僧これを聞てこれ能き人を得たり拙僧は月心とて東福寺會下の者我も常に此道をたしなみ

朝

侍るいざ下居たまへ暫時物語りいはんどひらみたる岩の塵打拂ひて二人差向ひにて互に
風流の咄しをなすに其好める事替らで甚其趣きをなしければ阿蘇次郎も一智を得たりと覺
びける月心いへらく拙僧も此嵯峨の花見んと昨日東山より來り遊びて夕邊は陰川寺に宿れ
り契り置たる事もあれば今より船舟院にまかりて宿り諸共に夜櫻を賞さんはいかゞ足下聞
意ありなば卒伴はんと勸れば宮城いふ様今日は如何なる因縁とや貴僧も御目に懸り刺さへ
て人静まるよ乗じ貴僧と手を携へて月夜の花を見直し侍らん旅は道連世はなさけさらば御
供申べしと打連立て不行にける其夜阿蘇次郎が月心和尚に示したる句時とて世に残れるあ
り次の日宮城阿蘇次郎は月心と連立出しが空もどんどりと霞み閉て雨催ひなり月心はまた
此とたりと訪ふ人のありとて懇に再會を契りてぞ立別ぬ阿蘇次郎もほどく一夕の奇遇を
感じ深く其厚志を謝して止まざりけり借も阿蘇次郎は不意の旅立よて路金とても用意せさ
れば爰まで來るに大方遣ひ果しつされども大丈夫なれば是等の瑣々たる事は物の數ともせ
財布を探り見ればいつか売にて錢さへあらねば今宵の旅籠はさらなり差當ると見れば向ふ
の繪馬堂は打仰ぎて立居たる男の髪は髻際よりたばねるばかり切髪してうしさまようらせ
しは恰も慈姑の形めき羊羹色なる一ツ小袖うち着て偽八丈の長羽織を引掛け短さ合口を貫
一十二 拔さしにしたるは所謂繪馬醫者の類ならんと微笑せしが彼の此方へ振向たる面付の何とや
らん近付のやうなれば世には似たる人も有ものかなと瞳を定めて見るうちに彼方も又阿蘇

日

此とたりと訪ふ人のありとて懇に再會を契りてぞ立別ぬ阿蘇次郎もほどく一夕の奇遇を
感じ深く其厚志を謝して止まざりけり借も阿蘇次郎は不意の旅立よて路金とても用意せさ
れば爰まで來るに大方遣ひ果しつされども大丈夫なれば是等の瑣々たる事は物の數ともせ
財布を探り見ればいつか売にて錢さへあらねば今宵の旅籠はさらなり差當ると見れば向ふ
の繪馬堂は打仰ぎて立居たる男の髪は髻際よりたばねるばかり切髪してうしさまようらせ
しは恰も慈姑の形めき羊羹色なる一ツ小袖うち着て偽八丈の長羽織を引掛け短さ合口を貫

記

財布を探り見ればいつか売にて錢さへあらねば今宵の旅籠はさらなり差當ると見れば向ふ
の繪馬堂は打仰ぎて立居たる男の髪は髻際よりたばねるばかり切髪してうしさまようらせ
しは恰も慈姑の形めき羊羹色なる一ツ小袖うち着て偽八丈の長羽織を引掛け短さ合口を貫
一十二 拔さしにしたるは所謂繪馬醫者の類ならんと微笑せしが彼の此方へ振向たる面付の何とや
らん近付のやうなれば世には似たる人も有ものかなと瞳を定めて見るうちに彼方も又阿蘇

二十 次郎を見て目を放さずしばしイミ打守りぬ此醫者の立花雞庵とて一條辰橋の邊に住ひゐるものなりしが是よりささちどの好を便りて周防の山口に下り國守大内殿の醫者秋野祐庵が弟子となり爰に立關番を勤め居しうち鶏庵素より放蕩者なればいつか祐庵が悴祐庵を咬かし折々は花見に准て連出し杯しつ祐庵をして父祐庵の金子二十兩を貸出させ是を借受其夜山口を逐電して京都へ歸れり鶏庵山口に在りし頃駒澤の門に入り其隣を閉じ行し故阿蘇朝次郎とも近付になり借も鶏庵は阿蘇次郎と見認し故送付寄て頼に禮となし一別以來疎遠の情を述べ又其上京の故を問ふ阿蘇次郎某事俄の故立よて意中乏しく斯憔悴しくして此近傍に徘徊ぬるよし打わけ今は如何とも詮術なし如何して宜んと相談するに鶏庵笑面を造り夫は噤み困りならんさあらば先我等方へ來り給へ何時迄もかくまひ申さんと感惚し誘ひけるよぞ阿蘇次郎深く悦び厚く謝禮す此時俄に空かき曇り雨降り出し二人は周章軒傳ひに鶏庵が家にたどり着ぬ鶏庵叫どて斯く容易かくまひしぞとなれば彼も阿蘇次郎の萬變に達せし事を知り居る故是を因に利を取らんとどの巧なり夫より阿蘇次郎は鶏庵が借宅にありて彼が鞠に任せ書の講釋を始めけるに京中の諸人阿蘇次郎が博識を開傳へて我もくも集ひ來て其門に入るもの夥しく謝儀また多く取りけるにぞ鶏庵は舌打して獨り笑みし其謝禮も大方と掠取りて十分に事を得たりと最誇り顔なり一度阿蘇次郎に出會し其議論を聞もの感服せざるはなく各其大才を賞していとも評判高かりければ後にはよしある人さへ門下に來りて遊ぶに鶏庵は獨り利を貪り先生よは祿々構はす新しき衣類をも着せざる様子なれば高弟共是を察し大に不足の色をなし陰に相談し下河原に一座の明座敷を借受け一切の膳道具

を取揃へ阿蘇次郎に勤めて是に移しました一人馬馬なる老僕と抱へて飯食とすはば家不問次郎が住宅なれば門人は益々多く衣食事ハ調すなりしと

○第五回

光陰矢の如く宮城阿蘇次郎のはや二十一才よぞなりにけり今年は何なる順氣にや卯月の初めよりして守治瀬田のあたり登の出る事夥しく夕暮杯には目口へ還入斗りにて十や二十拍は一拍にもとらる、杯と云の、しるは浮れ安さよ都の人の常なれば京離波の人は是を見んと酒肴を調へて館舟はさらなり守治橋のわたりは所せきまで差寄りて登符をぞ競ひける或日下河原の座しきにも宮城が内弟子蘆守忠吾伴野筑八の二人は兼て謀し合せし事にや阿蘇次郎に向ひ先生にも聞し召るゝ通り今年は守治川の登多く出て其光も格別なるよし先生も朝夕御指南のみにて慕し給へば御精も盡さ申すべし一日の間を倫み御出あらばよし御氣晴しならん我々も御供申さんと懇し勧めければ至極温順なる阿蘇次郎が好意より従へば二人の者の大に悦び遠に駕へ酒をつめ行厨の用意なき充分にして阿蘇次郎を先に立壯年の書生伴野筑八蘆守忠吾を伴ひ烏明より都門を出て伏見にいたり豊後橋を渡り小倉ついでを傳ひ行此わたり風景最佳なれば阿蘇次郎はいと興に入り心長閑に古詩など吟じて歩行ゆも一程もなく守治の境にいたりて黄檗山なる萬福寺の山門に入れば堂塔都て唐めきて珍らも夫より王聖寺平等院など見廻り扇の芝の故跡を尋ねまた名たたる涌圓が茶店に立寄り茶を呑み濁を凌ぎまたしも守治橋をわたり橋姫の祠の邊より伊み經が島龜が石を探り彼佐々木高綱が乗出したる橋の小島が崎は何れぞ捲の嶋はあれなるかと行つ戻りつたどりつ、川



六十二の面を見波せば此時未の刻なれどもはや笠狩の催しと覺しく種々の遊船共退々と差登り來て橋の上下は所せきまで打集ひて賑ひし事いふばかりなく是後の世の天満祭よさも似たる阿蘇次郎は二人の門弟と俱に橋の欄干に寄りてうち打詠め心を慰め居たりしが少し隔てし川上なる柳原の茂くたち込たるが時しも緑の蔭を合みていと静けき處なるに一艘の家舟を繫がせて主は誰ともしらぬ火の筑紫琴をしらべけるなまめいたる聲は加波頼伽を思ひやられ其爪音いと妙にして面白き事いふばかりなり阿蘇次郎眉を蹙めてはあやしやわの舟にて彈曲はしらぬ火といふ唱歌なり筑前の國主太宰相少貳殿の秘曲なるゆゑ西國にそら彈人稀なりわの末に十八段の波かへしとて秘ものありと云ければ忠吾筑八は今に初めぬ師の博識音律にさへくわしき事を感えける此時また川の面にも此琴の音を聞んとにや敷多の舟どもそぎよせて琴彈く舟を取巻ける筑八言やうあの彈人はごせならんかほどのよき聲は都にても容易く聞得べからず難波女かも知れずといふ阿蘇次郎いへらくいや／＼爪を考るゝ陰盛なり女の聲は陽なるものぞされどまた盲目はさひめて陰なるものなり此聲はしからずたしかに女の聲なれども陰中陽を含めば矢張兩眼明かなる乙女なるべし歌ひ方の床しさいいで近付寄て聞まほしと二人の者を諸俱に橋詰なる漁師を頼みて一艘の舟を借受け打乗りて彼の柳蔭の餘韻のあたりへさしやらしむ松頭早くも差寄せて彼船の側にこぎよせ舟を川中に繫ぎ己は其儀船端を枕にして臥しぬ阿蘇次郎等は割籠さへ杯取出し冷けき酒うち吞て興を扶け彼かへしの曲を聞に頓て爪音も止みければ集へる船共はれのが儘に散行き稍遠かるにつきて跡ひつそり静まる折柄彼船の障子開けて内の様あらはし見ゆ

紫校の拾のうへは柿地の小鶴雲嵐の帯をきて坐したるが其膝邊は齡十六七と覺し娘有て金糸のひた纏したる緋縮緬の装ひよて黒天鷲絨の帯を纏ひ同じ年頃の腰元三人付居たり其側よは一族の奥方めきたる女もほのみゆる琴は娘の前は横たわりあるよぞ今彈せし主とは知れぬ人々は香爐をまはしつゝ名香を開居たる跡いと高尚なりされば俄に物音の静まりしもむべなり斯る所は不意の風吹起つて船に有たる輕きものは何れも吹散したるに朝彼の娘の帽子をも吹まくりて是を卷上げ雲井邊に飛行けるこばしあつてこの仇風のなきければ先に卷上げたるものども落る中に帽子は輕きものなればひらり／＼と離り來る其様さぬ色の濃き紫なるが夕日輝さひて恰もあやあり鳳凰なんどの舞遊ふかどあやまたれつ腰元ども舟端へ出てあれよく／＼どもがけども其甲斐なしかなたこなたの舟よりも是を見てこは希代の見ものかなと罵りさむぐ其内に次第／＼に舞下りて阿蘇次郎が舟邊は落なんとするさまなれば萬に氣轉の阿蘇次郎幸ひ船の方に居合せたるにぞ自ら臆を採り一ツこじると見ぬしが程よき所にて阿蘇次郎左の手は後ろさまに臆をもち右の手を出して腰なる扇抜配どりの帽子を水際二尺ばかりにてこれを引掛どり得たり見る人一同は譽さはぐ聲しはしは鳴も止ざりけり此時阿蘇次郎思はず持たる臆を放せば我舟の舟に當りべたりとついたる様よて放す折よく腰元どもは船縁にありし故阿蘇次郎の其儀彼帽子を扇に乗せて差出しこはおぬし達の帽子よは侍らすやとて渡しければ腰元の淺香コハ添いと喜ぶのべ彼帽子を採り扇を返すとて熱々と阿蘇次郎を見るよ色白くして眉秀で威あつて優しき好男子の風は古へ宇治に遊びたる薫の君も斯やと思ふ斗りなるよ雲時見惚てゐたりしが頓て出來り阿蘇

次郎に向ひ手をつき禮義正しく言やう我方の主の申さるゝは先程娘が失ひたる帽子を惠み
 給はりしは悦び侍るなり見へ侍りて禮をも述べたく思ひいへば設けの筒へもいとすさびて侍
 れば九献まゐらせなんに渡せ給へど請じける阿蘇次郎答て先は帽子御手入て悦ばしく又
 お船召れ御酒給はる條懸なる仰せ最忝なく思ひ侍れどお船には女中のみればせなるに冠
 者として近付侍らん世の憚りなきにあらす無禮ながらも辭み申なりと述べれども聞入す
 朝種々言葉盡して誘ひける忠吾筑八は先づ方より彼美人の群見惚ていと好ましく思ひは
 どく喜び居たりしが是幸ひと腰元ども諸共に是非とも先生れ出われと勸れば腰元どもは
 顔先人質のそなへにて忠吾筑八を早くもれのが船へ誘ひ行き強て阿蘇次郎が袖すかり只
 管口説に不謹深き阿蘇次郎も今はほどくもておまじぬ此時一個切なき侍女出來りコハ物
 堅き石邊金吉様よ斯る風流の庭よ何かは苦むかるべきいと云つゝ手を採りて引入るゝに
 ぞ腰元共は更なり忠吾筑八までも是を扶け袖を引腰を押などして漸く船の中に誘ひ引入れ
 ける阿蘇次郎其時彼般の真中座を占め主顔なる女房に禮をなして其厚意を謝しまた坐な
 記みに挨拶を述べける彼女房は少し盛は過たれども水々しき其様咲返れたる牡丹の如く猶し
 も匂ひを失はず夫が娘と覺しきは世に勝れたる器量にてまさしく沈魚落雁の形ち閉月羞花
 の粧ひあり彼娘ひろかよ忍び目通す阿蘇次郎も思はずじつと見換しければ娘は莞爾り笑
 を作り袖かさねはふ有様は天津乙女の天降りて遊ぶにや或は又龍宮の姫が海底より出て慰
 ひがど覺ゆ筑八忠吾は是を見てほどくうつをぬかし物いふ事さへ雲時そぞろなり彼女
 房は帽子の禮を述べ終り見給ふ如く妾が船は殿達とてもなく最興なきに罷る渡らせ給ひし

と盃取上て在所酒の酔は足らず花の趣きをなさすと申せども一樹の蔭一河の流れも他生の
 縁とは申さずやうらなく思召てよと阿蘇次郎に献ければコハ圖らざる御製應え侍ると深
 く悦びけれども猶初々しき對面なれば互に打解る氣はひもなければ爰に出會ふ才子佳人は
 錦の上は花を添る寔に一雙の美玉の如しと見る者ごととに羨みけり

○第六六回

朝阿蘇次郎は何氣なく側なる扇子を取りて三四分押開き一座は免させ給へど會釋をなし胸の
 邊を打わふぎやをら置んとして思はず残りなく開き見れば一首の歌を書たるが筆のすさび
 の常ならぬと覺ゆ

梅が香をこむる霞の絶間より翻れて匂ふ露のこゑ

阿蘇次郎は見知りたる忠吾が扇子なるにぞ彼が方より向ひ是は足下の持給ひし扇子なるに歌
 のさまのやさしき黒付の麗しき事いふばかりなし何人の書れしにや其人床しと問ければ筑
 八は婦人の詠歌なりとてさる方より得侍りさ然れば其人は誰といふ事と知らずといふ
 記阿蘇次郎眉を蹙めさもあらば加茂の祐包かさらす誰ならん今世都て是程の歌よむ人は
 聞も及ばずと深く感じける侍女はほどく笑ひ入て餘よまじめの顔ばせかな夫こそ我方
 の主の詠たる歌なりといへば彼女房は侍女を叱りさな申し最と耻かしきといふ阿蘇次
 郎襟元を掻繕ひ扱々抽たる趣ありけるよと感ふ堪てぞゐたりける彼女房はいと耻らふさ
 まま欵侍ども先づ方より琴といひ香といひ殊に今の和歌などの風流たるけはひの趣き有に
 九十二 ぞ是が爲にみたり男子は其儘は押れて興は婦人の方に奪れ各てれたる有様なり負ぬ氣な

十三 伴野筑八爾へ兼て己が扇子の要の方を向ふさまになし彼女房の前に差出し此扇面は是なる我師の詠歌なりと見せびらかしぬ阿蘇次郎是を見て手に汗を握りけるに女房は早くも彼扇子を戴き開き見れば

朝 世の人の月は詠めしかたみぞと思へばく溢るゝ袖かな
と走り書なる墨付の美しさはさながら飛花落葉の如くなり是は情深きお歌にて近頃の秀逸

顔 言葉に酬ひ重ねて言やう先程弾給へる琴はたしか筑紫なる松浦檢校が手を付たるしらぬ
火といふ調よて筑前守殿の秘曲なりしと承はりさお聲もいと若やかにいみじう然はいか
なる妙女中よまし／＼けるやらん聞えはし包ます明させ給へかしと問ければ女房打聞てコ

日 へお尋にあひて耻かはしくころいへ我々は人よ甲斐なき者の族なりなせう明白に告参らす
日 べき又ぞ折ころいはいはめ左のたまふ殿ころよしあり氣なるは氣はひとく／＼名乗らせ給へど
いふ阿蘇次郎答へて某は西國の浪人なりもどこれ下郎のうへなればいかでおこがましくも

記 名乗いべき左はあれ我性として律の調子を好み侍るが今の御爪音の面白さ忘れやらす聞な
らく太宰の家よは菊のしほりといふ秘曲も侍るよし不知火を弾せ給ふうへはよも菊のしほ
りを知しめぬ事には有まじ今日は不思議の幸ありて古郷の音を承り一入奥深く覺え侍り

かしこけれと能き序にしあれば菊の枝折をも聞せ給へど望みける彼女房點頭てコへ委しく
も知し召れぬ其唄の娘も能く覺侍りやよ深雪かばかり懇切に仰するに疾く調べてお耳を
職しまるらせよといふ娘は只忍び目して只管阿蘇次郎に見惚て居たりしが是と聞より顔紅

あかめ心とさめき胸打騒ぎて死させ給へといふ言葉さへ口籠りていと耻かしげなり然ども
猶母も勸めて止まず此時深雪何かは知らず腰元淺香に密語しが淺香は阿蘇次郎が膝邊よ
居寄り最薄らかなる扇子を差置き是は物書で給はりいへ我方の御兩人の乞せ給ふよといふ
阿蘇次郎件の扇を採上ればいかよも媛の扇子と覺しく玉手に觸れ移り香の身にしむ斗り物
床しく裏表打返して見るにまばゆき銀地風も薫り見ゆるにぞいかに仰任せなん其料に
朝 柴は免まれ角まれ菊の枝折を弾じ給へど望みける娘はやと袖搔わふて猶耻らへば乳母と眞
柴は阿蘇次郎に向ひて我姫はまご初々しき部屋でもりよあればなせう殿達の前にして容易
と調べ給ふべき先方殿の譽給へる梅が香の唄は主が近頃手を付られし調子なり菊の枝折と
顔 同じ事情ますも其扇の書贊をなし給ひさあらばかへとにして主にも秘曲を弾て償ひ給へど
彼方此方を勘むれば母刀自も是を肯ひやをら調子を律に調べかへて最も優しき玉琴を撥鳴
日 しつ、あやどりける腰元は硯を出して阿蘇次郎扇の揮毫を乞ふ事の切なりければ今は固
辭に由なくて墨畫の一輪朝顔を畫き其上に

記 露のぬまの朝顔を照らす日影のつれなさよあはれいと村雨のはら／＼とふれか
とさら／＼と書下せり折柄梅が香の曲も果ければ娘は更なり女中達舉つて此扇を見るに歌
は催馬樂とやらんの調にて字体美きは草葉わけにさゝのゆく其水くさのよとみいとつゆ

十三 けくぞ見ぬよける斯る事に打興じて阿蘇次郎も覺ぬず數盃を傾け微醉機嫌人々に向ひて
今日は斗らずも斯る癡態にあづかり何報ふべき由もなければ今頃の扇子の書贊よ手をつけ

三 拙き音を聞か上げ少しの興をも添なんど側は有合ふ三味線掻抱き雲時調子を合せつゝ今
二十 阿蘇次郎が席上にて作りし露のひぬまの朝顔の唄に手をつけ一二遍うちかへして彈唄ふ其
聲妙に哀れなり聞人耳をろばだて感に堪へず徐に涙をさへこぼしつまたしもばらばらとふ
れかし杯唄ふとき天も感應ましくけん眞の村雨ばらばらと打るばら水の上舟の家根にも
音なふにぞ此うき人の肌よしめていと涼しく心地よげなり此時左右の障子開けばは黄昏
朝にて川面の數限りなき螢火の噂いやはましければ阿蘇次郎急度心付き日も暮果て婦人ばか
りの此席に長居せんもうしろめたしと早くも衣紋をかき種々の馳走を謝し二人の弟子
を急して我舟に乗移れば人々名残りを惜みける別て娘は戀人ど今日半日のまどひしてはや
十年も名染し心地せられ今別れては又いつの逢瀬やあらんと彼船を見送りて残る恨みのや
る方なくおめかけ染て忘れ兼ね涙に昏て居たりける阿蘇次郎は數多の船とこぎ抜行にいづ
れもはや盡興たれば先の橋詰より上り頓て旅籠屋を尋ね三人爰も宿りを求めぬ此わたりも
都て柳原よて戦げる木末のもと赤やかになりまばらくありて東の山の端より月さし登りろ
記の影大河に映じこがねの波はさ、れ立山の色をうつして黛をなし清風吹渡り白露は江に横
とりて涼しき事限りなく忘れては秋の空かと思ふばかり數千の螢火も月の爲に光を奪はれ
風景の目ざましく有けるにぞ只管詠入りてぞむたりしが隣りの垣つづりも女の聲をまじ
く筑八差覗きしよ此方を見入たる女の顔月の光に透し見れば紛ふ方なき先の腰元なれば筑
八笑して是は又爰までも不思議に邂逅はべるといふ腰元淺香は是を聞先の客にておはしま
師の殿にも宜しく申され給へ斯る事にあらば一ツ家に宿らんものと云つゝ入しが頼て又出

來たりて欄干に攀て此方の内をのぞき皆様是にいませり明なば我方の人々は石山へ詣する
なり殿達にも伴ひ給はんやといふ忠吾筑八わたり船と欣びて明日の約束をぞなしにける
斯て各臥戸に入りぬ阿蘇次郎は未だ夜の深きに起出二人の弟子を勸起せば二人は目を覺し
はや隣より誘ひ來しやと問よぞ阿蘇次郎いふ左に非ず急ぎ都へ歸らんと急立れば二人は是
を聞て大に不興氣にて雷よ約せし事もあれば南河の美人達と打連て石山へ行は昨日は優り
朝て面白かるべし先生も今日一日枉て我等と遊ばせ給へと只管勸むれども阿蘇次郎は頭を振て
窮士は寸陰を惜むべしと戒れば忠吾筑八は餘術なく大に望を失てまふく師匠の跡よつぎ
都へ歸ぬ宮城阿蘇次郎が宇治の川船と逢たる女房達の素性を尋ねれば筑紫なる大宰少貳殿
の浪人秋月弓之助が家内なり弓之助が妻を水青といひ娘を深雪と云り彼弓之助國を立退き
些の由緒を頼みて都に上り岡壺村に隠れ住みぬ弓之助は生れ得て其形容勇々數文武の才を
兼ね利さへ精兵の譽れ世に高し本國筑前より在りし時は太宰家に使へて二千八百石の知行を
探り番頭を勤しと素より大祿を領せし身なれば今斯浪々の身と成ても至極内福なる暮し
にて數多の家來を使ける昨日は雑色なる一族の内室をも誘ひて宇治の笠見も出たりさて此
弓之助が浪人したる譯といふは是より先太宰家足輕も足柄傳藏といふ者あり渠が妹におら
んどて生れ付可成の奇量なりしが同じ家中の馬廻り山十郎と密通せり其家原貧しければ山
十郎折に觸ては志しを遣しみつぎけるとかや

三十三 〇第七回
されば足柄傳藏は素これ善からぬ者なれば己が利を貪りてた隙が山十郎と通せし事知ら

顔にて打過ける斯ておらんはまたしも小野右近といふ者ども深く云替せしかば是を妻にせんいつりあはぬ縁なれば取親を拵らへ味く傳藏とも潤りて迎へとらん其設をぞ急ぎける山十郎其催しを聞とひとしく大に怒り傳藏を責てれ蘭は是非に我方へ申受すは武士道立難しと散々罵るに右近はまの約束せし事なれば右まれ左まれお蘭は我妻なりと双方すす言募りてさらば鎗先よて取て見せんと共に意氣地を立抜くに不親しき傍輩どもは三四十人ツ、も互に荷擔し相手を打果してお蘭を奪ひ立退んと夜盡雨家へ打集ひいまや切て出んとひしめきける老人などは中に入り扱ひ見れども聞入れず大騒動に及んとす其頃筑前の國司龍壽丸君未だ幼少よ在しける故賢女の聞ある後室紫光彈尼簾を垂て政事を聽せられしが此度の騒動を深く驚かせ給ひ物になれ甲斐なくしき者なればとて急ぎ秋月弓之助を呼出され今度の騒ぎ汝の組下のもの多し早く其場に行き無事に取計めよとの上意なり弓之助長りて直馬を飛せて馳行ける此時ははや双方白刃を打振り既一戦に及んとすれば弓之助馬を真中に乗付け後室より預り來りし御家の小旗を抜取つて前後左右をさへ上意くんと呼はりける是を見てさしもに亂れ騒ぎける徒黨の者共東西に別れて各地よひさまづき弓之助馬の上より大音揚げ御幼君と悔り諸代恩願の身として上の御爲を願す私の意恨に依て一命を果さんとの重々の不忠なり急度先非を改むべし又た傳藏の整居申付お蘭は尼となし一生縁付を許さずすれは双方武士は立なん御代替りの初めなれば御度の罪を問はず悉しと思ひ速に和睦をなし是より忠勤を勵み候へと上意と稱して諭したるもぞ双方共深く其理よ伏し且尼公の御仁心を感じお蘭さへ斯く御付らるゝ上は我々別に拵むべき意地とてもひは

すどさしもの逆亂忽地静まりしは全く弓之助が一時の機變よるものなり斯て弓之助登城して此由を後室へ上上げれば紫光彈尼御威あつて御褒美として謀あまた賜はり其時若殿龍壽丸殿御元服おらせられ元の如く大宰少貳よ任せられ給ふ此新少貳殿或日鷹野よ出給ひしが一陣の時雨を凌がんと僅よ有あふ三四人の近習を従へ御手に鷹を据へさせられてとる庵室に入せ給ふて閉るぬ内よは團爐裏の茶をばれて主はいづちへか行けん見ぬさりけり少貳殿主従は竹篠よ腰打掛け休らひ給ふ折柄雨も止たり唯手なる山本より袖笠して來れるはいどら若き尼なれば御佛へ供へんとにや寒菊山茶花折入れたる閑伽桶を手よ携げたり尼不斗見るに我慮よの給ふ御方はさも氣高き御出たちなり正しく國主より推せしかば垣根につくバひける少貳殿是を見給ひしより深く思を掛られ尼が傍に近寄りたまひ面を上よと仰けるよ尼いと耻かしげよ顔少し上げしさまは寔よ玉を欺く斗りなり梨花一枝春雨よ逢ふといふけはひよて今の雨よろば濡れて哀れよたをやきたる其姿墨衣も綾錦より生ぬさたり少貳殿名は何ぞと問せ給へば惠春と申す世捨人に侍るといふ殿は歸御るさに道々も近習に記語らせ給ふは借むべし絶世の佳人此輩に埋め置ん事を去にても美人の如何なる故よ尼とは成りし訝しさと心ありげにのたまへば追々馳付たる御供の内を知る人のあつてあれころは足輕傳藏と申者の妹よていし聞ゆしといふ殿點頭せられ元の名に改めて還俗せよと仰せあり遂に召仕せ給ひける外面如菩薩内心如夜叉と説れたる如く此お蘭の方は顔ばせのあてやかには似もつかずその心いと怖ろしく奸才また類なかりければ佞媚をもつて君の心を露かし獨り寵愛を専らにせしかば殿は何をかしてお蘭を悦せんと早く傳藏を取立側用人と

六十三

なまじめらる傳藏素より佞奸なれば己に詣ふ者を暴負し忠義の人を仇讐の如く忌嫌ひ罪に陥し或は退けなどせよ世よつろは小人の習ひ此傳藏が常路も取入り利を得んと望むものも多かり爰に間瀬久太夫とて千石の禄を領し番頭を勤め一子久之進が爲に美女を求めて之を嫁にせんと種々心を費しけるに或人來りて足下の求め給ふ注文に叶ひたる娘ころわれそは秋月弓之助が娘にて深雪といへる者ころ世と過れたる器量より鐵の草鞋を踏破りて日本國中を索しても是より外にはあるべからずと勘めけるに久太夫父子も其人柄は素り見もし聞もしたる故頻に懇望して秋月家へ申入れけるに實明なる弓之助日頃間瀬親子が人と成りて悪み其家風を卑み居れば容易受引べうもあらず事に慮託け断りを云けるに久太夫は猶懲すまにやる方なく密に計り頓て今日出なる傳藏も取入重く賄賂をなす殿の御慶掛りをねがひ秋月の娘を娘と仰付らる様執成を頼みける太宰少貳殿は傳藏がいふに仰せて即日秋月弓之助間瀬久太夫を召れ汝等よりは似合頃なる子供を男女持たるよし家柄も相應なれば手が媒酌して遣はす急き日を撰びて婚儀を調へ然るべしとの嚴命に久太夫は大に悦びけるる一雨之助ははつと思ひ素り心には濟ねども君命否びし由なく其座は先御受をなして塵々屋敷へ歸りしが快々として樂しませ妻の水青は夫の容顏つねならねば心を痛めて故を問ふに弓之助も嘆息し新君色に耽りて佞人を近け給ふ早當家も季よなりたり傳藏先年の事を意趣に思ひ折し觸れて我を辱しむ其上腹黒き間瀬久太夫を取持ち上意を借りて好しからぬ婚儀を成しむる事總て彼が斗ひによれり寔に奇怪なり國道よきときは去と聞くいざや暇を乞捨にして片時も早く立去るべしと女房にもあかしければ強ても諫めず寔に其支度をぞなし

七十三

にける或日弓之助は月番の家老の宅へ至り封状を玄關に差置古實の如く番頭の備正して鐵砲切火繩の者を左右に立せ家内を後陳に圍せつ、静々と旗を打立ける殿は弓之助が封状を見て己が不足を云並べ推て暇を請捨にする杯言語同断の曲者なりと以の外に怒らせ給ひ退手を懸よと敦囑給ふを御母堂紫光彈尼頼殿を宥め彼が舊功を述べられて止め給ひし故弓之助は事なく筑前の國を引取り家内を供して京に上り今の岡崎の屋敷を買得て移り住てぞゐたりけれ是は以前の話なり爰も又秋月弓之助は娘深雪も今年にはや十六才も成しかば能き簪をとりて娶せんと妻の水青諸共に種種心を費し詩歌茶香の友達にさへ頼みて才かたち揃ひたる人を尋ねけり弓之助が和歌の友に加茂の祐包といふ人あり或日岡崎村より弓之助に逢て言けるは兼て足下の望まれる俾ころありといふ東福寺の月心和尙先頃浪人宮城阿蘇次郎と云人に嵐山よて出會し事を語り

船浮て誰物の音にあそぶらん嵐の山の花の木蔭れ
と詠みたる事また夕べの詩句渡月橋頭人渡月月明劫在里白間と作りたる其人物の氣高さは更にも言す才器も古今獨歩なりと申されさ拙者未だ其人を見されども知る、如くうらなき月心師の言事は偽は有べからず月心師は出家の事なり誰ぞ然るべき媒人を頼み申入て見給ふべしと言ければ弓之助は素より祐包の篤實を能く知り居れば尋常の媒人口とは思はれず深く信じてろは能く知せ給へりさもあらば手づるを求めて語らひ見侍らんと厚く其好意を謝して種々響應し歸しける去共弓之助は生質願良にて東福寺の月心とは親しき友達なるが夏の中と山籠りして下山せされば態々尋ね行て半日の閑談をなし其席にて阿蘇次

八十三 郎が人品をぞ尋ねける月心がいふ彼の宮城氏は今の世の英雄にて寔に王佐の才ある人なり
詩哥の頃は其はした藝よして既に聞えし彼人の歌
うき事の猶此上は積れかゝ限りある身の心ためさん

朝 某とは日頃親しき中なればそれがし媒妁をなせば容易く事をなしあふせ申さんとしたり願
して阿蘇次郎が才と器量と口と任せて只管一娶そやしてぞ居たりけり

朝 鶏庵といふ者あり折ふし其坐居合せ是を聞夫は幸なる事ころわれ其宮城氏は子細ありて
り出し宮城氏親しき人もがな媒人は頼さんと考ふるに日頃此家に心安く入来る醫者立花

○第八回

日 篤實温厚の弓之助が性として浮たる調子に乗ざれば何れ足下のお世話と蒙らん併ながら一
應其人品を試し見た上の事にこそとて一人の娘の事なれば斯大事掛け念を入るゝも理な

記 阿蘇次郎とやらんも一座せしめて其人をも見まはしければ貴老御苦勞ながら宮城氏へ月の
庭には必ず入らせ給ひと我事を傳へ給まへといへば鶏庵は承諾して岡崎を立出て下河原

も岡崎なる娘深雪は宇治にて見染し戀人は筑八が其名を書付與し故宮城阿蘇次郎なる事を

しれり今しも其人を輝にせんとの下心にて父が月見の催しを喜ぶ事限りなく母の水青に乳
人の眞柴腰元淺香と顔見合せ打笑へとも水青を物堅さ夫を恐れて先頃阿蘇次郎に盛持に
て出逢たる事をば深く隠し冊共も口止せし故昔々内証にて私語のひ勇み立てて見えぬ
ける斯て其日となりければ深雪は朝まだきよ起出て白粉紅よと粧ひ飾り櫛は何れせん
は開が宜るべしと立騒ぎつゝ鏡臺に向へば眞柴は娘の脊を打叩てあやかり者に侍りなと
朝 戯言いへば淺香も亦浦山しくいへなと罵りて家内は嘆き居たりけり日も傾く頃立花鶏庵い
ささきあへず駈來り扱扱残念なり彼阿蘇次郎ぬし俄の病にて参り難し宜しく断り吳よと申
されぬ今朝見舞し時は風も大方さめし故随分行んとて月代をつゝみ居られしが後に誘しと
願 さは如何も大熱くて頭痛あるゝが如く高枕として打臥われし故脈を窺ひひ一方なら
ぬ邪勢なれば参られぬも無理ならず御兼題は讀置てはべる今宵の主は届け呉よと申されし
日 と懐ろより取出し弓之助へ渡しける弓之助は請取て雲時あされて言葉もなし妻も娘もほど
く望を失ひかざしの花を風に取りられさやけき月の黒雲に掩はれし心地して空さへしはし
記 かさ曇り翳を打しめりてぞ見ぬよける弓之助は阿蘇次郎が兼題を讀下せば美しき手跡にて
山の葉も今宵ばかりはななくもがな入方をしき望月の影

春雄

九十三 願みける深雪は我意を述たる一首の戀歌を短冊に認め鶏庵が立歸る袖を引止め是にも残り
の詠吟なりと己れ夫婦がよみ歌をも交へて鶏庵よ渡し序もわらば宮城氏よ見せて給はれと

十四 ひと彼懐紙の中に巻籠て渡せば鶏庵は何の氣も付かず其儘懐よして下河原に至り阿蘇次郎
が様子を見て弓之助が口上を傳へ件の懐紙を差置て歸りける跡よて阿蘇次郎の繰返し見る
中に一枚の短冊挿まれあるを取あげ見るよ

流れては末のうさ身をいかよせんかかげぶつ字治の川霧

朝

日

日

日

と書たる書色いと露けし阿蘇次郎熟々と打守り此歌主の名を深雪と記せり字治よて逢し
深雪なるに此歌の心も訝しとひとりぢ思案の頭傾けぬ爰にまた萩野祐仙は醫學修業の爲
番々都へ上り三本木にて川つきの座しさを借りこの頃住て有けるに鶏庵とはしなく出逢け
れば鶏庵は其かみの不将を詫へるよ祐仙は素より愚しき者なれば早くも鶏庵の伎辨に迷は
され又も懇交りける或日鶏庵祐仙が三本木の旅宿よ來り話の序に昨日は最遺憾き事ころ
ありつれ惜むべし一簾の酒を香損ねしとつふやくよと夫は何の事ありしやと云ければ雞
庵がいふ宮坂氏を秋月弓之助といふ人ひとり娘の掣にせんとて先其人品を見まく思ひ月見
の會を催し我等も取次せしめて招かれしが其日よなりて阿蘇次郎病の爲に行ざりし故其事
遂に水になりし嗚呼彼阿蘇次郎は福分薄くして絶世の美女を得ざりしと歎息して止まざり
けり祐仙がいふろれば岡崎の秋月氏よて其美女の名の深雪といはずや雞庵のやしみ如何に
もしかなり貴邊はいかよして夫を知れりや祐仙笑つて曰く某先つ頃清水に詣しとき舞臺に
て行違ひに其人を見たるが今の世の薄雪ともいふべき凄さまでに美しかりき一目見るより
肌しびれて酔るが如く夫より夜として夢想せざるはなし其日跡をつけて見ぬ隠れし喜ひ行
旅人の住める岡崎の屋敷をも見届け且隣りの婆婆よ問ひて其苗字をも知りぬ常々清水の觀

朝

日

日

日

日

一十四

音に願込して火物断せし奇特にや今日満願の日に當り足下より此手づるを聞出せしは正し
く縁しのあるしなり如何に雞庵の秋月氏へ某を養子に世話して給はれと聞て雞庵笑
を忍び思ふに阿蘇次郎と祐仙とをくらふれば誠には是雪と墨なる違ひなり去共先年祐仙より
金を借りし事ある故みすすうちつけにねしは不男なり此縁談整ふべからずとも言れず
と思ひ成程計ひ見るべし去ながら先よは未だ其人は見ざれども阿蘇次郎が高名を慕ひて掣
朝よせんと心得なれば他の人の事言出しても逆も承引せられまじ祐仙がいふさらば某を以
て阿蘇次郎となして連行れよとのつわきならす言けるよ雞庵もほとく困りさりさの給
へども阿蘇次郎は月代頭なり君よは烏芋の如き元結のささいかた容易く似せらるべき祐仙
言やう何さほど前髪剃る事難からんと言つゝ財布より小判三十兩取出して先是は當座の手
付なり出来なば多分の骨折代を參らすべしと雞庵が前に差置に慾に目のなき雞庵なれば跡
は野となれ山となれ先は金子の兎なりと直に金子を受納め左程思ひ給はし施すべき手術も
あらんと間よ合せて言て其日は別れ翌晚又雞庵祐仙が方へ來りければ祐仙手拭よて鉢着し
浴衣のまゝにて出迎へ笑顔つければ雞庵是を見て打笑ひ君も亦風引給ひしか此頃の風の神
は兎角色男にたゝる事よと戯れけり祐仙手早く手拭とるよ何時の間にかは元服してありけ
れば餘りの事よ鶏庵は笑ひさへ出す居たりしに祐仙はいと誇りかに何と能似合つらん早く
秋月氏へ連行給へど只管頼みければ鶏庵は逆もの序よ今十四五兩もせしめんと目論見一日
一日と左よ右に日數をぞ過しける或日祐仙朝まださより雞庵方へ行き今日是非共秋月氏
へ引合せよと嚴しくせり立けるよぞ今は通る事ならずしふくながら着替して祐仙と打

二十四 連一條もどり橋の宿をはなれ東山を廻りてこそと伴ひ行て四條の板見なら祇園林を徐々と
ためらい歩行に不斗向を見れば五十斗の侍一人の僕を召連來れば雞庵思はず口迂りわれこ
ろ秋月弓之助殿よと言ふよ出わひ頭に雞庵老此間は如何よ見限り給ひし鮎の道を切けん絶
て御尋もあらずといへば奚庵も是に應じて叮嚀に挨拶す弓之助重ねて彼宮城氏今程は御病
氣も全快ありけるが手前に如何にても苦しからず必ず御同伴よて御入來われと言けるよ私
仙は先づ方より頼み庵庵が袖を引き宮城阿蘇次郎是にいと早く秋月氏へ引達せられよと私
語よぞ雞庵今更何と詮術なく幸ひ宮城氏病氣全快よて是に同道致したり阿蘇次郎殿早く秋
月氏へ御對面ありと弓之助へ引達すれば祐仙は武士の身振をせんと頼にりさみ衣紋を正し
某は宮城阿蘇次郎と申者以來御懇意を蒙りなん日外の御會の折は生憎所勞にて參上致さず
失禮と申残念至極なりと流石大内殿の御内にて家中の交際に武士の口上を覺えぬしゆゑ後
は知らず先は化濟しつ弓之助是を見より大に驚き雲時呆れしが世には又斯まで機も男も
るものかなとはや心に八九分の不平を生じ覺えず冷笑ひつゝ言葉さへも交へず祐仙は仕濟
したりとしたり顔して鶏庵に向ひ兼て懇望せし秋月氏に圖らずも御意を得何程か悦ばしく
途中よては緩りと話もなし難し彼なる茶店にて一献仕らんと強に請じければ弓之助は最不
興氣にて不承と中村屋が店よ登り持寶隠れに三人打集ひ物語ふに鶏庵は獨心を苦め今
や祐仙が化の皮を顯すかと手に汗を握り何か頬赤く耳はてりて針の起す座するが如く生た
る心地はなかりけり頼て仲居ども種々酒肴を持來り並ふる程は祐仙は近頃都に登りたる書
書生なれば充分得意の顔色にて只管亭主張て弓之助へ盃せし体裁く甚だ不骨に野暮なる事

のみにて酌をせんとて銚子を傾くる時袖口より匂ひ袋の轉び出たる杯最も可笑き景狀なり

○第九回

斯て祐仙は何がな弓之助へ懇應にと日頃己が愚昧を顯し田樂を申ながら犬又喰せんとしてわ
んど吠ろくと云つゝ犬に與へんとして誤て膝に落せしを拾ひとりて喰ふなと沙汰の限り
にぞ見ぬよける弓之助は是等の様子を見て益々冷笑ひ此奴は世にいふ名盗人の類ならん手
朝並を試して困らせくれんと即座よ七言絶句を作り對面の情を述べた答を給はるべしと乞ひ
ければ祐仙も是よはひしと差支へ早く韻字を探し出さんと急は急は趣向も浮ます只管思
案に暮れれども生れ付たる不器用ものなればおのれが親は才智を澤よ生付ざりしと只々頼
に親を怨み小首傾け苦む事半日はかりにして漸く作り上げ候なる半紙にでうしの道ふた
る跡の如くにちり書して怖々差出せば弓之助取上て此詩を見るよ僅に平仄の合たる迄にて
其未熟なる事云ん方なく其上手跡の拙さは恰も釘折を撒きたる如くなり弓之助忽地氣色を
損じ遂に持病の疝氣起れりと挨拶さへもろこよして其座を蹴立て岡崎の宅に歸り憤り
肥すよまじく居間に通れば水青は娘もろとも出迎へて夫が氣色只ならぬを氣遣ふと弓之助は
眼血走りいさまさつ水青が常々噂せし阿蘇次郎めに今日初めて出逢たりと云ば水青は喜び
夫は先幸の事噓かじ好き男にてありつらんと云ば弓之助打腹立ち何馬鹿なる事丹波娘よ均
しき下郎虚名を賣りあるさ身の形付をせんと工むけしからぬ大騙り鶏庵めも我に一ばい喰
せたり其證據は是を見よ此詩の作りさまはと散々に罵り如何にしても心得ぬは祐包月心の
三十四 輩なり彼人々に限りすゝるなる事の内されぬ筈なるに大騙めが人の知らぬ名歌名詩を盗み

時へ己が物顔に贈りし故彼衆も皆々欺れしは苦々しき事なりとついになき腹立ちなれば水
 青は更合熱ゆかず其詩を取上げ見るに其意は知らず其字体いと醜げなるよぞ夫の憤は
 理りなれども眞の阿蘇次郎が手跡とは驚と鳥の違ひなり是は極て如何なるあせものか阿蘇
 次郎も化て夫を欺きしと推しければ其一人も逢しとは明て言れぬ時宜なるに娘深雪も肌身
 放さぬ朝顔の扇子を父に見せたくは思へども宇治にて逢しは内々の事なれば只もどかしさ
 朝に母と顔見合せ打萎れてぞのたりけり翌の朝雞庵見舞に來れば弓之助は家内の者と言付け
 奥へは通さず病と稱して逢されば雞庵すこく立んとするを水青は袖を引とめてるなれば
 共は左右より雞庵をとらへした、かにさいなむにぞ流石と鐵面なる雞庵もほどく面白
 失ひ其坐に堪兼命からく逃歸り見れば我家は祐仙來りて待て居り片時も早く岡崎へ連
 日行と催促しければ進退爰に極れども色にも見せず成程秋月氏へ能々言込置たれば何時に
 ても飛行給へど一寸逸れを言へば祐仙は實と思ひ急ぎ岡崎へ行て秋月が玄關に案内と弓之
 助是を聞より留守なりとて追返す祐仙は幾度行どもしかありけるゆゑさばかりの白痴なれ
 ども漸く其様子を悟り血眼に成て雞庵が許に來り種々縁事を並べ雞庵が初持逃せし二十
 兩に今度の手附と都合五十兩只今返せと罵りて腕をまくり雞庵にむしりつきた、かよ打
 擲す雞庵漸々押なだめさわれれば先手附の三十兩丈は預先より取返し明日へ返し申べしと
 なく欺り濟し其夜の内に諸道具を賣拂ひ透電して行衛知れず憐むべし秋月氏性來の愚味
 とは云ながら只一場の色慾よりあせもの、畏に懸り前後五十兩の金子を失ひ其業に似つか

はぬ野郎頭と刺さずてり此事既に隠れなく世の人の笑ひとぞなりよける斯て下河原なる宮
 城阿蘇次郎は所勞快氣しければ先頃秋月が月見の會に招きたる其好意を謝さんと袴羽織
 など立派に出たち今日岡崎を尋ね秋月が玄關に至り宮城阿蘇次郎にては秋月氏御在宿に
 は御逢を願ひ侍ると申入ける腰元淺香は此聲を洩聞さるもの、透より覗見て周章狼狽走り
 入水青に告知らと杯家内いろくとして喜びけるに弓之助は聲を助まし取次を叱り高やか
 朝に叫びけるを阿蘇次郎早くも聞取り其儘口上を云捨一禮述てを歸りける程經て阿蘇次郎が
 下河原の宿に肥後より飛脚下り事あるに依り此書狀着次第此者を召連れ即日に来るべしと
 申越ける故阿蘇次郎は驚きて家を片付歸心矢の如く夜を日と續て下りける夫は阿蘇次郎が
 父廉助のはや没し老母が九死一生の病に臥し露命旦夕に迫りしに一門の人々を集めけるよ
 和田三浦の一家の如く幼少の小供迄を數ふれば九十人餘れる親類なり世に在るうちにと
 て夫々に遺物別して後老母は一座を見流し頼て末期の盃を献酬せしと委時は座も静まりて
 何となく打しめりぬ此時子持の嫁ども母御前は聊の逆事なく一人の孫とも先立て玉はす十
 配分の果報いみじき御臨終なれば此世に思ひ残りはあらせ玉はじと言ひ慰めければ老母は重
 き枕をあげて今しも其方達の申さるゝを聞ば我陸終果報充分なれども爰はひとつの心残り
 ころあり末の子阿蘇次郎は一度御國を出しより今其行衛を知らず互に御上を恐れし故雁
 の音信も絶果たり夫と違ひ我は女の愚痴未練今此座に連りたる九十人の人々より阿蘇次郎
 五十四をた、一目見て死にたしと覺ゆす聲を立てさめく、と泣ければ夫は道理よといふより一
 同悲歎の涙よくれにける人々此有様を見るよ忍びず色々相談の上罷さつてを頼み御部屋安

四井の方より後聞入れしよともよ辨れと覺されて此事ひそかに伺ひ給ひけるに菊地殿仰には
六十彼の切腹代りの追放なり召返す事は叶わぬぞ去ながら是迄も罪あつて追放せしもの盡の
内は憚りぬれども夜の陰に忍び来るよし不届なる奴原なれば家老共に申付急度吟味に及ぶ
筈なれども凡る國を治る事は重箱の掃除を摺木にて洗ふが如く隅々は行届ぬが宜しきもの
ぞと有けるに雲井の方より早速此内意を知らせ玉ふに一門の者共大に悦び扱ころ期急飛
朝脚を立て俄に阿蘇次郎を呼下したるものなり扱も阿蘇次郎は取る物もとり敢ず都を立出し
が程なく肥後國より下りて夜に紛れて屋敷へ至り旅装の儘にて母の病問ふ打通り枕邊に近付
顔て阿蘇松にて御氣色は如何と問はれ給ふといふに母は聞よりこは阿蘇松か懐しやと待て
がれたる我子の顔ひと目見るより莞爾と笑ひ眠るが如く往生せり人々の歎きは言ふ方なし
中よも阿蘇次郎は落涙せきあへず聲を放ちて悲しめり喪の内よ奥深き持佛堂よ閉籠り七日
の速夜をつとめ香花を供して百日の間在すが如く仕へしがさてしも名残りは盡ねども
御擗の身を憐り又も國元をなたち南の關を出で筑後の内なる或る山家に些の好みを便りて
記行き爰より里人の子供等を集めて手習の指南をして營業とし母の神牌を祀り東の方を望んで
遙は兩親の塚を拜み斯して一年の喪を勤め了りぬればまた都へ登らんと其支度を調へ此所
を立出日を重ねて長門の赤間が關に至り阿蘇松寺の舟を借りて順風よ帆を掲げ行に程なく
播磨瀧明石の浦にぞ着よける此夕後ろの山より僅の雲起ると見ゆしが忽地一天搖揺り恰も
墨を流すが如く刺へ雷鳴渡り物冷まじき氣色なり良有て雨風止みぬれば海水へ長大と色同
じき迄に晴渡り頼て一輪の月影雪間より洩出る所は名たる須磨明石向ふの方は淡路島蛇

の這へるが如きは阿波の眉山黛の如くなり此時阿蘇次郎は結端に在けるが不斗思ひ出しけ
るは先年宇治の猿狩りて圖らずも絶世の美女よ出逢しが其折も斯く皎き月の夜なりしが所
は變れ今月今日今其人は如何になりけるぞ年はいさよふ頃なりし今頃は齒を染め袖をどめ
て誰が金屋の花どやなりけん其後手よ入りし一首の戀歌はながれての末の浮身はいかよせ
ん係へだつ宇治の川霧ろの名深雪と書たるを懷紙に巻添へ贈りしは我よ真情あるやなしや
朝懐しの都鳥言問ふ由も波の上になさしうつふけは襟元よひやりと落たる苦の車に思はず仰向
く後の方は千石船の水押の下なれば扱は先の夕立よ彼松に舫ひありしかど獨りぢちつ、眺
顔めけるに海面は益和ぎて見ゆ渡りけり

○第十回

松吹く風も音絶てぬしは誰ともしらぬひの心筑紫の琴の音は確かに隣りの船なりと耳轉る
日あなたには未だ曲をば成されと最情ある音にて寔に爽々として俄雨の如く小粒は颯々と
してさ、めどどの如しと云へる思ひあり春雄は雲時開入りて覺えず感涙を催し胸を斷つば
記かりなりしが曲果て、後また音なし只風清く月白きのみ春雄思ふに扱も怪しき事かな今の
唱歌は我昔し三筋の糸に調べし朝顔の曲なりさると如何なる人のいかなれば斯る松路よ彈
ぜしぞと徐に疑ひ居たりけり是はこれ別人ならず秋月弓之助が娘深雪にぞ有ける如何なれ
ば今此船よ在て琴を弾せしぞといふに是より先舊藩主太宰の少貳殿姫嫁れ蘭を愛せられ
七十四れが兄足輕傳藏を取立國政を任せられしが傳藏はもと匹夫なる故君の威とかり古參の人々
をないがしろにし不時の課役を懸けて民を苦めければ領内の百姓共一揆の企蜂の如く

起りて袖が浦の城下よ詰掛けお蘭傳藏を賜はるべしと強訴に及ぶ御母堂紫光院殿の御心付にて秋月弓之助を召歸され此大亂を鎮むべしとの上意なり弓之助初め國を出し時は再び本國へ歸らしと思ひしが弓之助未だ小性立のころ御囃子の席にて誦損じ既罪せらるべきを紫光院殿其頃御願中よ未だいと若く新維の前とすされしが殿へ御託言仰られ種々御執成ありし故危き命を助かりし大恩須彌より高く蒼海より深ければ此度は枉て御母公の御内朝意より從ひ急はしく支度をなし岡崎の宿は妻水青に仕舞はせ跡より下るべしと手はづを定め已は先娘深雪を供し住馴し都を立出浪花の港より國司の御手船に乗りて下りけるが是も先の俄雨に逢て此明石の浦に泊り居たるなり扱又弓之助が娘深雪は宇治の笠袴にて阿蘇次郎を見初しが同じ都に住ながら再び相見る由もなく其上せものゝ爲に妨げられ利へ筑紫へ下りなば逢ふよしもあらんと忘る、際もなく只管焦れつゝ心地さへ例ならず先の夕立の怖さに薄衣を引かつぎて臥居たるよ打静り海面もなきたりと言ふを聞いていと物憂げよ起出しが船口に差入る月の光わかくして白日の如く夜も更て人皆眠りたるよありあふ須磨琴を掻鳴し我戀人の作りたる朝顔の唄を調べ想ふ心を合ませ哀れげよ弾じけるよ阿蘇次郎此曲を聞終り且怪み且床しく只其人の懐き幸ひ京へ登りける法師の乗合せし故夫が持るうらま琴を借りてひと年深雪が母水青が宇治よて弾ける梅が香をいみぢう妙にあやとれば隣りの船なる深雪は此音を聞て耳をそばだて眉をひうめ聞ば聞程其人を見たく思ひけり素り深雪は音律を知る事類なく我戀人の音べとは臆氣ならず推せしより臥床を忍出さし足しつゝ、やぐらよ登り手摺に寄て見下をに折よく阿蘇次郎も苦押はねて窺へば彌清朝き月明りに

思はず見替す顔と顔深雪も春雄も夫と見ては懐しと言んとせし後よりいつの間に来りけん弓之助娘の帯を取らへてやれ浮雲しと引入れば深雪はやるせなき儘に我ある事を知らせんぞ記念の扇子を取も取へず春雄を目掛けて投げけるよ誤たず阿蘇次郎が膝の上に落ければ阿蘇次郎は取る手も遅しと押開き月よかざして見れば覺ある朝顔の繪なりさればころ推せし如く先つ方の琴の主も深雪にて有つるよと益々深雪が眞實を知り身に染々と感じける深雪はたまの逢瀬に言葉も替さず只管かこちて居たりしが父が寂入るを待兼て又も漸々忍び出怖さも忘れて櫓よりさし覗くはづみにどうと落にけり阿蘇次郎驚きて見てあれば深雪は天満に落倒れて息も絶る斗の有様なるに擁き抱へて氣付を含ませ種々にいたはりければ深雪は漸々人心地つき阿蘇次郎をじつと見ていと嬉しげに打守り知て召かは知れども私の名は深雪とて筑紫の浪人秋月弓之助が娘にていそも宇治の川舟で不斗見染たる縁しより其螢火はこがれねと妾が胸の内にては月の起も徒らにいたつき給ふつれなさは月よむら雲花風仇し媒人に欺れ様々の妨よ逢しより只一筋に縁の綱思ひ細りて玉の緒も絶ぬらん未だ枕はかはさねと両夫よ見ぬぬといふ操を露許りも哀れと思し夫婦となつて給ひねと膝にひれふしむせび入つゝ口説ける阿蘇次郎も深雪が心根を思ひ遣り夫は理よ我とても色に出ぬる戀衣はや重ねたく思へども要るに必ず媒人あり互に武士の家を生れ何ぞ不正の事を成せばさや我望を遂し上は然るべき媒人を以て表向よて入ん無事に在して折を待れよ早く歸りてよ重ねて邂逅などなだめすかして別れんとす深雪は怨の涙にむせび斯まで想ひ慕し身の偶逢ふて此儘に歸れとは曲もなしあわれ此身を何處よも運て退て給はれかし若も此

十五 儘本國なる筑紫へ歸るは間瀬久之進と言者に祝言せよと無体に殿の仰のい假令命を失ふとも異夫にまみぬいさ左は右もわれいさばや連行給へと播口説けば阿蘇次郎は彌ふびんと思へども我今御身を連退かば御両親の恨を受け無上の謗を如何にせん心短かく思さずと疾ひ有とも慮りて延し玉ふ内よは仕様もありなん先々船へ歸り給へと種々言説せども聞入れず如何程申ても承給はずは是非もなしさらばと一聲身を踊らせ千尋の海へ飛入ん朝とすれば阿蘇次郎の周章を抱き止め左程と思す事ならば如何にも望みよ任せなん我小節に係りて秋月殿の愛子を見殺しにせんも不仁なり祝言は左も右も御何に汚名を蒙るも斯く實ある情人をいかでか強面く見果つべき必ずはやまり給ふなど制す言葉に深雪は居直りて素より母は事情を知らば斯る事にて立退しと跡よて聞給は悦び給ふは必定なれば妾は恙なく君よ從ひ立退くを只一筆書残さん硯があらば貸給へといふは阿蘇次郎腰を探りて頭を掻き南無三寶先の方狼狽て墨斗を海へ落したり是は如何せんといふは深雪のさらば今一度船に歸りて書置を殘し亦些の手廻りを携へ参りなんと阿蘇次郎に腰を押しからうじて船に登り我臥床に至りて急はしく書置を認め其儘父が枕元に差置立んとせしが若や又是が一生の別れとならんも測り難しと父の兼顔を唯一目と心斗りの暇乞せんものと打寄りて見てこの悲し妾は只戀のみよ浮身をやつし常々不孝に過せし故天の御罰や蒙りけん父君は引かつぎて臥し給へば御顔を拜む事叶はずさあらばお目や覺し玉はん如何はせんと起つ居いつとゆみながらにぬづくと蒲團を少しまくれども何も知らず口をやくと寐入たる其顔を熱々打守りあら勿躰なや不義と云ふにはなけれども思ふ男よ添添んと御暇申て出て行

不孝の罪は免させ玉へ跡にて嘸や歎き給はん名残惜しやと腰を呑み流石別れの悲しさを覺ぬぞ懸る涙の雨父弓之助は目を覺し娘が様子心得ずと其儘襦をかひつかめばこは悲しやと泣出そに側なる書付を弓之助取らんとすれば深雪はおはて、窓より海へ投出せし此物音に侍女どもは何事と立騒ぐに松頭も起出て水夫共を呼び汐も能きや早や松を漕出せと叫聲に勵され水夫は一度よかけ聲しつ、錨をおこしやとら布帆を引揚れば船は忽地矢を射る朝如くに走り出で阿蘇次郎が乗たる小舟とは東西に引分れたれば又も縁しを隔てける

○第十一回

花に百日の盛なく人よ百才の壽なしと言ふは宜なる哉大内介殿の儒者駒澤了庵老病にて早や危篤と迫りければ親類を枕元に集め了庵不肖と雖も二代の君に仕へて輕からぬ君命を榮り利へ老中の職をも汚しつ抑も我政事加談の職と言ふは戦場よて軍師の指揮を如く治世に於ての相談役に當家にては古來より我一人に限る未だ類なき重職なれば我跡を續する者我甥宮城阿蘇次郎ならで外になし然れ共彼もと青雲の志あつて御直參を望み居れば我跡を譲らんと言共容易く承引すべからず去よ依り我死したりども其儘病ひ重しと偽り急ぎ都より呼下し此遺書を見せ各勤めて玉はりなば今日を閉るども聊恨は残らじと懇切に云置しが程もあらせす無情の風に誘はれ哀れ墓なく黄泉の旅に赴きける去程よ阿蘇次郎は去る夕の雨よまたたげられ明石の浦に船やどりせしがはしなく秋月弓之助が娘深雪は遊近ひ其が貞操の情はほだされて連退んとせし折からゆくりなくも深雪が船は俄に帆を引揚り馳出せしゆゑ忽地東西に引分れしかば夫より都へ上り元の下河原の宿に居たれども心の内に



五 是其人を忘る、隙なく猛き武士と雖も戀には想ひよはる習ひ只快々として樂しまず斯る所
四 周防山口より火急の消息して叔父了庵重き病に臥し思ひ内云ふべき事あり片時も早
く來るべしと申越ければ又も席をあらたむるに暇なく思ひ叔父の事なれば最成道はしく
思ひ取るものも取り敢ず其日の内に出立して道と急ぎ行ければ頓て山口なる駒澤が屋しき
へ至りぬ親類共は待受て阿蘇次郎に向ひ主人了庵はや事切れたり故討いまはし認められた
朝 書あり和主に渡し吳よとの遺言なりと告げるに阿蘇次郎聞もへず双眼涙にうるみ意以
しく遺書を開き見れば了庵代々主恩を蒙り莫大の御取立に興り重誠を辱けなふすされども
顔 一の寸功をも立すして今徒に相果るは残念なりめはれ汝在て此家督を繼ぎ我を替りて國の
爲家の爲に誠忠を盡し吳よと震る手よて悉く書遺したるよぞ阿蘇次郎も悲歎に替れ義理の
日 叔父の死後の頼み切も余義なき事ともなり我宿志を遂んとて強て否むは道ならずと心を
決して肯ひければ人々悦び頼て一通の願書了庵病危きに依り甥なる宮城阿蘇次郎と急養
子になし度越きを認め親類の何某是を月翁家老に差出し其志持を頼みけるに此由家老兼よ
記 上聞し達せられしかば事故なく御開濟有て家督相違なく仰付られたれば姓名を改め駒澤
次郎左衛門と稱しける未だ中老職に仰付られねども先親の如く政事加護役にすなされける
是全く次郎左衛門年若なれども才學世に勝れ又其性の温厚の聞ぬあるに依れりとを頼て次
郎左衛門は父が葬式祀りなど形の如く執行ひ七日七日の思も果しければ日毎に築山の館に
出仕し奉公を不勵みける次郎左衛門は養父了庵が遺言をかたく守り君の御大事よは一命を
塵芥よりも輕し無二の誠忠を盡さんと心懸しぞ奇特なり次郎工衛門は加誠職の事なれば常

ト家老衆より政務を談せらる、に職分の事なれば一々是を辨論する其判斷甚だ明白にて
極て道理に協ひ又人に勝れたる了簡などもありける故家老の面々も其才養父よも優りて當
世無双の若者後々は御用よも立べきものなりと最頼母しくぞ思ひける然れども次郎左衛門
は彌謙遜り聊も出過たる事を成ねば人の目かきよも立ざりけり斯て數多の月日を過しが當
主大内之介多々羅滿與朝臣は參勤して鎌倉に在し、が當時新大磯の邸第一の大夫松葉屋の
朝 瀬川といふもの、艶色に迷ひて晝夜淫酒に耽り當中の勤務も怠りかちなるにぞ誠忠の近臣
どもは替るく諫言を奉るよ其度ごとよ都て御手討いなされ猶其上よも荒々しき御振舞の
多かりければ仄に閉じしにや或時管領上杉殿より大内家の長臣冷泉帶刀を召れ滿與殿放蕩
の聞ぬあり事明白にならざる内再應諫めて行を改めなば珍重なれと若も此上尋るに於ては
日 數代連綿たる國家よは替らるまじ早く世繼を願ひて介殿を拜籠置さ然るべしと御内意仰渡
されけるに冷泉帶刀畏り承りて退出せしが悉傷大方ならず急ぎ本國へ急務を下し管領より
云々の御内意なり事違々に及ひなば臍を確ども甲斐なからん早く評定に及るべしとの文面
記 なり斯て急使寸刻を争ひ馳付けるよぞ當家の一族山岡玄書允を初めとして老殿列座にて此
急書を開き見て各色を失ひこはゆ、しき大事なり然れば大評定をなすべしと一家中よ觸流
して騎士以上の者ども一人も殘らず惣出仕を成しめ大書院よ山岡殿を上座として家中の
面々格式に従ひて座よ就けばさしもの廣間よも居餘りて操籠までも人ならぬ所もなし月翁
の家老相良主馬滿座を見渡し帶刀が來音の趣きを言聞せ御家の安危此時なり假令小謀の者
五 たりとも忠義を重んじ思ふ所あらば憚りなく申されべしとを述にける是を聞き一同平伏せ

五十五

五 たりとも忠義を重んじ思ふ所あらば憚りなく申されべしとを述にける是を聞き一同平伏せ

五十六 しが是迄諫言せし者は悉く御手討にあひしと聞恐れを懐き各眉を認め譲合ふ而已よて一言も發する者なし又重役の人々詮議區々なりと雖も何れも今一應諫言を奉るゝ如すと云ふより外にさせる良策もあらざれば先其日の評定は徒ら事とぞ見ぬにける斯て三日四日と打續に家老を初め一言を出す者もあらざりしが駒澤次郎左衛門は我若年の分を顧みて數多の歴々の中には何とかな言出る人もあらめと默して扣へ居たりしが未だ評論定まり兼ね徒に數日を費すを迂しくおもひ列を出て言やう不肖の僕れは歴々の御前を憚らすさしでがましくいへとも當家の危急存亡の秋に當り思ふ旨をすさいれば不忠なるべし願には左ばかり放蕩なれしすとも素り聰明なる御方なれば臣たる者は只管賢を盡していつまでも諫め申す如きは仕合せ得らるべしと發言せしが執事山岡玄義允は胸に一物あつて期殿の不行跡なる沙汰を聞より心の中に密に喜び己が嫡子を世繼に立たく思ふ故今若駒澤が異見を用ゐて鎌倉へ下しなば極めて大望の妨げなるべしと思ひ駒澤が言葉を押さて殿へ直に諫言とは心得ず是迄諫めし者を手討にせられしは幾人と言ふ事を知らず今又諫めんとせば徒に怒を指のみにして益なし十全の奇計にあらず老輩を差置き若年の身を以て諫言深とは片願いたし扣へ召れど支ゆれば次郎左衛門良まり仰の通り拙者如き素り其人に非ずと雖も此度家督の御禮と稱し君へ見惑は一致とならば施すべき術のいなり何卒此御役仰付られたしと丹誠をもてに願ければ相良主馬も傍より駒澤氏が思慮ある事は各も知る、所なれば其望に任せ下向なごしむとも恐くは失なかるべし主馬は受合ひすなり各是に決せらるべしといふ列座の者

記

日

顔

朝

七十五 しが敢て拒む者なく異口同音に此儀最も宜しかるべしと申けるよぞ山岡も詮方なく多數の衆議に決して遂に駒澤次郎左衛門は鎌倉へ下す事とはなしぬ斯て駒澤次郎左衛門は急ぎ度を整へて鎌倉へ下り佐臣等の拒み遮るを厭はず強て大守に面謁を願ひ素より英敏秀才の士なれば機も臨み變に應じて忽地に太守の意も適ひ遊里の供なきながら徐々ぞ諫言を呈し遂に亂行を止まらせ參らせしかば此驍助を奇貨として大内家を横領せんと巧みし奸臣佐人ども妨嫌者に思ひけりされば短慮給達の大内殿も忠臣次郎左衛門が諫言に従ひて遂には學問にのみ心を入れ賜ひ世に賢明の君と仰がれて國家を泰山の安きに置しは皆駒澤が奇策も出て實に前代未聞の名臣なりと此頃評判高くして其智術德行を賞めにけるが駒澤未だ妻なしと聞て娘を持たる者は皆嫁よせんぞと縁談を申入る事限りなし然れども次郎左衛門阿蘇次郎たりし頃秋月弓之助が娘深雪と二世を掛ての縁しと結びし故信を守る事金石の如くなれば何程歴々の家柄より縁を乞ひ需めらるゝとも都て斷り敢てとりあはざりければ駒澤氏は開けよき人なれども内心は色好みにておしなべて縁談を否まるゝにやと怪む者もあり又は才智勝れた人なれば如何なる望みか有ての事ならんと思ふもありしが折しも秋月弓之助は主君の使節を兼ね大番に交代して此折鎌倉に下り桐ヶ谷なる少貳殿の屋敷に在て駒澤と言者は當時無雙の豪傑なりと傳聞さ娘深雪を妻に送り親類の縁を結ばんと其人を知る者に頼みければ彼人言やう是迄御直參の歴々方より申入るさへも駒澤更に承引す迎も此縁談整ふまじと聞ども柱て是非とも申入られて見られよ假令徒に勞する程よもせよ某が一生のこゝろやりなればと只管頼みければ媒人も今は此事を得ず仇事ならんと思へども

記 日 顔 朝

七十五

八十五 申入んと駒澤に逢ひて其由を告げれば次郎左衛門案外の事に思ひ宇治まで逢たる娘の名は深雪とは覺ゆしが其の父を名を知らざりしに圖らずも明石の浦の月の夜に不思議と舟にて邂逅ひ其時初めて秋月が娘なる事を知りたるに今斯家老職にも成たるにぞ遠からず山口へ下りなば彼人は程近う筑前よ在るなれば婚姻を求めんとせしやささへ媒人來りて斯言出せしかば喜ぶと限りなく猶念を押して太宰小貳殿の御内なる事を問ひ益安塔し一議にも及ばず承引す娘は事の成れるを喜びて直に秋月が宿所に馳行き此趣を告げるにぞ弓之助の喜び譬んは物なく斯速に事の整ひしは娘深雪が密に語ひ置し事とは夢にも知らず全く是は我祖分なるべしと心よ自慢を生じ取敢ず贈物して喜を表し厚く媒人に報ひける

○第十一回

日 世の諺に言ふ會は別れの初めとやらん深雪は圖らずも阿蘇次郎と明石の浦邊まで邂逅ひ二世の契を約し走り去らんと支度せしが其船俄に出帆せし故心ならずも父もろ俱筑紫へ下り吹岡の屋敷へ歸り住一間に籠りて物思ふ身は故郷ながら旅にしまさる愛を重ね嚙な妾を賢配なき者とや思せらん只一筋に慕ひしものとはや忘やし給ひけん殿子は心多きものと聞く花にうつろひしとぞ腹立しけれなど深く思へばうさ寐鳥獨りかたしくうさ袖が浦いつかは君よあひの鳥海の中道中々にいさの松原風絶ていつか心地さへ例ならず三伏の熱氣もたれ込てのみ過しける秋月弓之助は娘が斯る心意氣とは露知す然れといつぞや明石の浦の船の上にて深雪が多めく物を海へ投入願ふ悲歎に沈みたるるよりを怪み若や言替せし戀人の有て懸幕の餘りしかせしならんか假令彼が甚ふ者は如何程の人なりともよも駒澤が氣量に

は及ふまゝ深雪は深窓に人となり眼のうち未だ廣からず我四十年以來天下に奔走せしかる未だ駒澤如き才智揃へる人を見ず然れば渠若一度駒澤を見れば極て否む事はあらずと此趣を細々と認めたる一封の手紙を急ぎ本國筑紫へ遣はしける吹岡はる秋月が屋敷よは妻の水青は老實しく夫の留守を守り日々其消息を待けるに今日しも家來が鎌倉より御使よりいとて文箱差出せば水青は夫の状を見るに無事とあるに先安塔して封を切て讀了り一度は悦び一度は愁へたり悦べるは能く報を得たるが故怒るは娘は別に戀人有て常に慕へる氣はひなれば如何なる凶事か仕出しなると思ふが故なり水青は篤と思案を定め娘を諭して玉を至ふせんに如じと乳人の眞柴を納戸へ呼寄し密に相談せしに腰に淺香は不斗足を漏聞き深雪が部屋へ走り行てお嬢様今鎌倉よりの御便は云々の事にいと私語さければ深雪は聞より胸のふれ愛時語もなかりしが此時淺香は奥より呼るゝに予立行ける跡まで深雪はひとりち扱は斯る憂事を聞ん端か先の夜の夢見の悪かりつる殿の御聲懸にて心よ濟ぬ言名付に遇んとせしを年月の苦に病むが圖らず開漸久之進俄に病て亡たるにぞ漸く一ツの煩を除たる記にさもあるは想ふ人よ添遂んと佛に祈り神願ふ力も仇に思ひさや今日の便に駒澤殿とやらんよ嫁入せよと無體な父の命かな妾が身に戀人有て如何なる義理約束のあるとては露ばかりも推し玉はで早や言名づけをさせ玉ふとやお情なき成れかたど先づ年の殿を怨み今日日は又父を怨み其餘其折へ倒れ伏し杖に餘れる両袖を顔に押あてよとこそ泣出せしはなべて掃ふる女のけはひなり母の水青は此体を見て傍に人なければ咳しつゝ入りければ深雪の遽然居直りて襟掻き泣ぬ風情に取紛らせと愁思面を顯れければ水青は近く側に寄添ひ

十六娘が脊を押なで、道理なり、脊丈の延たる娘をバ未だ生娘と思へるは子よは目のなき親
心や、深雪其様にむづかるな其方に淺香が口ばしりて婚姻の事を知りしならんそなたの心
の中に戀慕ふ人ありとは疾より推したるもや思ひも寄らぬ此度の事うなたは心よ濟ぬとは
思ふらめ先父上のお多を見よ輝と言ふは鎮西の探題六ヶ國の主大内介殿の御家老駒澤次郎
左衛門殿とて三千石の知行採り鎌倉一の武夫なるより其文道も賢く萬の事何一といふ
朝事なく世に稀なる男にて色は雪より白く器量骨柄天晴なる男なり分は過たるよき年を得た
りどあの物堅き父上の此様に器量の事迄細に書せ給ひ加之駒澤殿の人品を慕ひ御旗本の殿
々方より娘や妹を遣はさんと慾望ありしに駒澤殿如何なる事とや固く辭りしかば鎌倉中の
評判どなり媒人なかりしが是ころ氷月神の縁とや此方より入るが否直ちに承知有りしと
かや然ば父上の仰畏み承知してたべさもあらば親への孝行其身の冥加なりこなたの慕ふは
日前かた宇治の里にて一度見られたる宮城阿蘇次郎殿の事成べし其人は浪人と官ひ其後更に
様子も聞ず殊更鶏庵めが駈りなど色々の噂あり斯る間違あるは必竟これ縁のなきが故なら
記ん縁ある時は千里の外も會の習ひ丁度此度の駒澤殿の如く速し事の整ふころ深き縁のある
といふなれ此理解をよく辨へよ鬼にも蛇にもあらぬ母が無仁の斗ひ耻を言ねば理が聞ぬ
といふ世の諺も縁あるなしのいはれといふは現在この母が身のうへ話し十八年以來つゝ
みしが今慈子の可愛さよ耻を忘れて語るろよ妾未だ若かりしとき乳母の媒に依て若氣の至
り跡先見す里の隣なる爪生主水といふ武士と人知れず契を結び末の松山波こすとも互の縁
ひは違へしと一年餘りを過せしうちそなたの爲には血父様とが父宇佐見彌五左衛門殿或日

御城より下り給ひ母上にすさる、やう今日は圖らず御前に召れ娘水背はやかしづきの頃な
れば幸ひ秋月弓之助とは同等の家柄年頃も似合しよし弓之助は至て利發者なり予が媒妁よ
て婚姻中付るぞと有難き御上意弓之助が人品家風は素より望む所殊に嚴命忝なく早速御請
やたり殿にも満足に思すとの御意にて御酒をさへ下されて御勤め有ける故よき機縁にて歸
り然あらば近日弓之助方より日を撰び結納を送り來るべし此方よも早や用意をなすべしと
朝悦び給ふ故母上は更なり家内はさ、めきて祝ひ唯せも妾の夫よ引替て丁度そなたの機縁に
驚き思ひ詰るかたなさに其夜塙を乗越て隣屋敷へ忍び行主水殿と逢ふて事の仔細を詳し
顔語りこは何とせんと氣もそゝろ浮沈し迫る我身の上如何い斗ひ給ふぞと位つ口説つせし内
日主水殿も思案し慕し体なりしが稍あつてこは是非もなき次第なり知る、如く我は此家の
養子なり折を見て縁談中入んと心掛しは流石に養母の手前は彼と心ならず延て今日となり
たり眞實の母親なりせば疾く耳にも入れて相談とも成べきを斯手遅れとなりしは是迄の縁
よてありつらん又おぬしは殿の御聲が、りよて奥方新雜の前の御取持となれば等閑ならぬ
記重き事は全く天より授け給ふ因縁と言者なり我は今よりふつと思切なんおぬしは忠と孝と
の爲に秋月方へ嫁入し給へ我に於ては聊も心を殘さずと言放されし故是に腹が立まいもの
か覺ぬす齒切をなして夫は餘りなる仰せかな妾一度言替せし事思ひ切難しいさはより何處
へなりとも連れ退き給ふかさなくば此場に於て手に懸て殺してたべと種々怨をたれば其
一十六時主水殿の言るには夫は女の一途といふものゝ然あるべき事なれども能々事と辨へ給ひ
我は養子の身分色に感ひて恩義深き母を捨て養家の名跡を絶させ又弓之助にも虫付女を妾

六よしたりと世上に笑す事は又人情の忍びざる所なり孝義の天の道色は人慾の私を聞天の道
を捨る事は我は得せぬ程に是非共死んとなり早く歸りてぬし一人死玉へといふはより
餘りの事に興覺て呆れ惑ひて家歸り熱々思ひ廻らすに一人死ねといふ程の不實者に義理
を立不孝者と世に笑はるゝも詮なき事あの様に不實者なれば來世の契も頼みなし僧さもよ
くし主水殿への面わて旁一向世間へ知ぬうちには事々嫁入して見せんと心と決し還し此家の
朝妻となりしが夫弓之助殿の物堅き氣質なれば最趣きなく折に觸ては好た殿御とて主水殿の
事幕ひつれども馴染といふ物は又格別なるものにていつか夫弓之助殿がいとさうなり願て
るなれを設けしぞや其中中田中にて主水殿と行ふ事ありしが其人も妻を持て念慮慎深く盡
の風情もせられず熟思ふ其時主水殿すげなくいはれたるが武人の信切にてあらずやうな
たは又阿蘇次郎とは友白髪の契を結びたるといふにも非ず字治にて見し迄の事と明石の浦
日の事とは夢も知らねば彼人はうなたの斯様に暮ふを知らて今のはや妻を迎へられしも知
れず鮑の片想とやらん徒ら思ひ慕してあたら姿もうつろひ果ん縁言なれども駒澤は世に勝
記れたる人なりと父上の言越し玉も母も又恥をもあかす程の眞身を辨へ父母へ孝行には早く
其人を思切り機嫌能く駒澤へ嫁入してたべと種々に口説立られて深雪は此長物無用ながら
顔さへもあげず泣沈みて有けるが母の異見の骨身染しが漸々に顔とわけ勿体なき不幸の
罪は免させ給へ御言葉に諾ひ駒澤殿とやらん嫁入して御慈悲深き父母の御心を休め参ら
せんと身の過失を悔みつる聲を幽かに詔申せば母の水青は深く悦び是はでかせり健氣なり
と只管又妻はやしぬ斯て返事を認め幸ひの便ありければ此趣きといひ遣りけり鎌倉なる弓

之助が宿よは媒人の手ひにて駒澤方より申入越せし上今又妻が文届きて娘も親義なく承知
したる趣きを知りて安堵し其悦び限りなし

○第十一回

去程深雪は一心金石よりも固く阿蘇次郎に約せし事を守り夫が爲に他家へ嫁づく心は路
程もなく如何にもして此家を忍び出情人に尋ね逢はばやと其折をぞ城ひける是必竟前日の暮
朝に得心の体に見せしは家内油断をさせんと心なり或夜深雪は一通の書置して間に紛れ
て遁れ出都を指て走りけり戀の意氣地にあらざしていかで女の只一人途の旅に赴くべき水
青は娘が書置を見るより人心地もなく周章て人を走らせ追駆させ祈禱し占ひよと騒ぎ惑ひ
て狼狽れども到底歸り來らねば今は如何とも詮無く泣々此由を認め鎌倉へ使を走せ弓之
助に告知せしに弓之助の驚き一方ならず先年明石の松にての風情合熱ゆかずと思ひしも畢
究是迄其吟味もなさで浮々油断せしころ悔しけれどもだゆれども甲斐なし然はあれ今更駒
澤へ對し何と言譯あるべき我武士の身として一旦約せしは何様明白に申さるべき深雪めが
不届にて當時の賢人と言る、駒澤は辱を興し事氣の毒なりと心を傷め種々思ひ回らせし
が不圖一計を思ひ付我聲の面目を掩ん爲め一生に一度の戲言をいふべしと家の子供と固く
口止して願て使を遣し娘深雪事急病にて世を遊たりとて駒澤方へ申送りければ治郎左衛門
は大きに悲ひ歎けども又許術もあらざりければ遂に其縁談は止たれども尙駒澤を慕ふ聲ら
は婦人不幸ありと聞て又退々縁談を言入る者多し然れ共次郎左衛門は深雪既に死去しうへ
は誓て後妻を娶るまさと潔よく言放ち何れも固く斷りけり扱も深雪は吹岡の屋敷を忍出東

四十六

を指して走りけるがいつか菊の園をこへ若松の汀をも北に見て程なくくる木といふ所に
到る爰迄は晝は隠れ朝夕のぼのぐらき露にたどりけるが退かくる者共は其顔だとも見ざり
けり深雪は夜更て宿を出るの驛のはづれより越方を見送れば五十斗りの男廿四五と思ひ
女を供し驛氣なれど親子とは知られけるが聲をかけておむと、は獨旅と見ゆるが大御宮へ抜
参りせらる、か我等は防州邊まで行くものなり旅は道遠と申せば一程に行へばと懸にいふ
朝、深雪は立留り見れば至極實體らしき野夫なれば如何にも妾は上方へ登る者夫なるはお娘
子にていか女同士の遠慮もあらずさおらば道連に成給はらんと打進て行うちには彼の野夫が
娘は世馴たる氣はひしてうちなくも語らひける故深雪は大に安堵して行きてはや小倉の城
下にいたり或る茶見世は腰打かけ雲時休らふに彼野夫深雪に私語さけるは是より先に文字
が關とて旅人を改むる番所ありたむすは往來切手を持給ふかといへば深雪は是に出て其段
なしと答ふ野夫は是を聞き眉をよせて夫は氣の毒なる事かな切手なければ爰よりは水陸と
もに通る事叶はずといふ深雪はほど、途方に昏れ黙してのみを居たりしが此老夫のい
配ふ爰より仕方あり我等親子の切手は二人と記せり此二の字の中へ一黒を加へ三の字とな
し關守を欺き安々通し参らせんとて番加へ直に關の戸に至り此切手を見せて何の苦もなく
通りける斯て深雪は彼の老夫より從ひて隼人の瀬戸を渡り赤間が關へぞ着にける三人是より
歩行路を経て急ぐ程に日ならず周防國小瀬川と言所は近着ぬ此所は凡百軒斗りの小村なり
彼老夫深雪に向ひて此所に我在所なれば寛々我家に逗留して行たまへとて路傍の木蔭に深
雪を立しめ此茅屋が我住居なりとて老夫は一足先に入り家婦に向ひて莞爾に耳もとへ口を

朝

顔

日

配

五十六

寄せ極美しい鳥を二羽じめたり一羽はものに成さうな物と私語き深雪を呼入て家の有様を見
廻せば庭より手桶湯を汲入て持來り上り口にて鹽を移しお前達は隱草臥玉はん洗はし玉
は奥へいて緩々くつろぎ休み玉へ深雪は家婦に向ひ是は慮外なり道すがらも御亭主の御
世話になり侍るといふて草鞋脚半をばとくに皮肉腫れうさて喰入たる紐の跡さへ付たり連
の女も俱にひとつ盥にて足を洗ひやをら盥所によじり上れば家婦は一間に誘ひ行き枕なを
朝あてがひ溢茶を持來りて覆應しける深雪は素これ深窓に人となり萬初々しく何の心も付す
して彼等が心切を喜びける去とも連の女も家婦が娘にもあらぬ挨拶する故深く訝り怪みけ
り此女は小支那といふて博多の柳町の遊女なり些の事より欠落して小倉の方に赴き彼老人
は出逢しなり彼老夫實義の様は紛らせとも素これ畏をも抜る古狐の如き悪者ゆゑ所の者も
後には其名の吉兵衛といは呼す狐兵衛とぞ唱へける去れば此小支那は素より遊女の事なれば
手管は馴たるもの故初より吉兵衛を人買と推しければ此小支那は素より遊女の事なれば
と欺されたる振して能き目論見をなさんと知らぬ顔もて來りしなり小支那は熟々と深雪が
立振舞のたをやぎたるは極て良家の娘なりと見て人買とも知らず若き御身もて一人旅し玉ふ
守を窺ひ深雪に私語くやう御身は只人にては在すまじ斯うら若き御身もて一人旅し玉ふ
懸路に迫りての事とは疾より推し侍る我身は素より往來の人にくる、かきの土うさ川竹
の流は漂よひ世の有様を見馴し故此家の主をば早くも人買とは知侍る此家に入來る者は都
て良らぬ者斗り符調とて彼等が隠し言葉を聞き御身を高く買んどの様子なり御身今地獄
へ落玉へば迎も浮び玉ふ事は成難し頓て賣渡され玉ひなんわないたはしと涙に暮ければ深

朝

顔

日

配

六十六 雪は是を聞よりも面色土の如く雲時呆れて居たりしが涙ぐみて言るやうこは情ある御言葉
かな推量違はず子細有て夫を尋る一人旅扱も主人は人買にて有けるか然れば今は籠の
鳥雲井と歸らん由もなし素より操を立ぬく妾が心故郷を出しより命は捨てなまもの観念
しつれば時は臨み死と見る事歸るが如き覺悟かこし是見給へど懐より取出したる九寸五分
試み拔放せは皓々たる刃の光りは霜を欺く斗りなり小支那は覺えずぞつとして流石は武家
朝の御娘御潔き御覺悟去乍ら死は易く生は難しと又一心は岩をも通せといふ左程切なる御懸
時運は天道次第なり御命だよあるならば何時かは其御人選近給ふべし叶ぬ迄も艱苦を
顔 凌ぎ身を全ふして御尋ねあれ今日は主人は西隣にて人買仲間と車座よて酒盛してあれば今
宵の内におれ給へ此家の後ろは蘆垣一重なり潜出給ふ程の妾切はときてしるしの白紙を付
置なん夫を見當ふ忍出で走り給へど敵へ又深雪が鬚の乱れなと直しければ深雪の悦び一方
日 ならずもし程の程はいつの世よかは忘るべきとて鬢に挿たる銀の簪取りて小支那に
配 與へ些の心付をを願しける斯て深雪は暮る、を待て居たりけり神無月の大方時雨勝なる
配に今日も時雨ていと物哀に見ぬにけり深雪はひとり柱にもたれ居たりしが入相の鐘鳴
りはや黄昏の景色なれば心細さも彌増して雲井をわたる馬の翼に羨ましくを思はる、此時
雨は降來り浦風は吹暮るよ不物凄じき事いふばかりなり頓て家婦は燈を熱し向ふより風呂
に呼れて出行ぬれば小支那は深雪を勵ましさいさ此隙に逃給へど急はしく引立るにぞ深雪は
徐ろよ喜び其儘裏手に忍行き白紙の枝折を見るよ天の與と潜り出提傳ひに赴らんとするよ
一天墨を流すが如く東西をさへ辨へず足元は葦原にて唯一筋の細路なり深雪は杖の料一垣

六十六 雪は是を聞よりも面色土の如く雲時呆れて居たりしが涙ぐみて言るやうこは情ある御言葉
かな推量違はず子細有て夫を尋る一人旅扱も主人は人買にて有けるか然れば今は籠の
鳥雲井と歸らん由もなし素より操を立ぬく妾が心故郷を出しより命は捨てなまもの観念
しつれば時は臨み死と見る事歸るが如き覺悟かこし是見給へど懐より取出したる九寸五分
試み拔放せは皓々たる刃の光りは霜を欺く斗りなり小支那は覺えずぞつとして流石は武家
朝の御娘御潔き御覺悟去乍ら死は易く生は難しと又一心は岩をも通せといふ左程切なる御懸
時運は天道次第なり御命だよあるならば何時かは其御人選近給ふべし叶ぬ迄も艱苦を
顔 凌ぎ身を全ふして御尋ねあれ今日は主人は西隣にて人買仲間と車座よて酒盛してあれば今
宵の内におれ給へ此家の後ろは蘆垣一重なり潜出給ふ程の妾切はときてしるしの白紙を付
置なん夫を見當ふ忍出で走り給へど敵へ又深雪が鬚の乱れなと直しければ深雪の悦び一方
日 ならずもし程の程はいつの世よかは忘るべきとて鬢に挿たる銀の簪取りて小支那に
配 與へ些の心付をを願しける斯て深雪は暮る、を待て居たりけり神無月の大方時雨勝なる
配に今日も時雨ていと物哀に見ぬにけり深雪はひとり柱にもたれ居たりしが入相の鐘鳴
りはや黄昏の景色なれば心細さも彌増して雲井をわたる馬の翼に羨ましくを思はる、此時
雨は降來り浦風は吹暮るよ不物凄じき事いふばかりなり頓て家婦は燈を熱し向ふより風呂
に呼れて出行ぬれば小支那は深雪を勵ましさいさ此隙に逃給へど急はしく引立るにぞ深雪は
徐ろよ喜び其儘裏手に忍行き白紙の枝折を見るよ天の與と潜り出提傳ひに赴らんとするよ
一天墨を流すが如く東西をさへ辨へず足元は葦原にて唯一筋の細路なり深雪は杖の料一垣

七十六 念佛者の功德を喜び恰も地獄で佛に逢し心地せり折柄順風吹出ければ頓て帆を揚げ只一夜
の内は播磨の室の津よぞ着にける此老人といふは室の津の色里にて數多の遊女を抱へ置茶

の竹を抜きたるを持て地へ跪づき天神を祈りて此竹杖の倒れし方を東とし給へど杖の倒れ
し方へ足に任せて只管走るに葦の刈株にて足に疵つけ鮮血流れて痛堪難かり後を見返れば
數多の松明振照し罵り騒ぎて走り來るとわれを追來る者ならんと思へば肝魂も身に付ず猶
只管よ走れども素よりかよわき女の足追手は次第に近付ぬ一籠の藪の透間より洩出る月影
よすかし見れば近傍はあらはなる冬木立にて大きな石佛のあるのみにて身を隠すべき處
朝もなく進退爰も極りぬれば死すべき時よ死されば死にまさる恥ありと懐中なる短刀を取出
さんとするよ何時の間にかは取落してありければ然らば此池に身を沈めんと水の深みを尋
顔 ぬれと音さへ足らぬ淺瀉にさらば縊れて死もべしと幸ひと江に望みたる柳の垂枝に畏をつ
くり襟を合せぬはや岸より飛下んと南無と一聲叫ひしとき十夜参りも見ぬ小提灯を持珠
數爪繰り南無阿彌陀佛と唱へ來りし老人深雪が南無の一聲を聞付け正しく首を凝と見るより
日 矢庭に飛懸つて抱き止め月の光も照し見れば十七八の手弱女の年ふる柳の許に在て両手を
合せぬはや縊れんとせし所なれば彼人種々深雪をなぐめ様子を見て己が所もあかし見殺し
記にすれば傷まし些の物入は後生の爲よ此老人が御扶け申さんと懇切にいたはるうち早や追
手の者は駈來り大事の代物を棒にふらんとせしとて直に引立て行んとせしを彼人種々に扱
ひ懐の財布より金子を取出し彼吉兵衛よとらせ追手の者よも與へ漸々事を済し深雪を連歸
り船頭を呼起し子細あれは早く松を出せと急立れば碇引わけ漕出も深雪は人買の手を連れ
念佛者の功德を喜び恰も地獄で佛に逢し心地せり折柄順風吹出ければ頓て帆を揚げ只一夜
の内は播磨の室の津よぞ着にける此老人といふは室の津の色里にて數多の遊女を抱へ置茶

六屋の亭主なり名を吉兵衛といふ此吉兵衛は生れ付片付なる故砂の吉兵衛と異名せり常に田舎渡世して子ども買出しが防州の小瀬川はせげんの古巢なればとて疾より此所より居て其代物を鑿索せしよ此頃畏ぬけの狐兵衛が二人の女を連れ来りし故竊に窺ひ直ふみ懸りしが此道にするとき砂吉は年増は望す手入りの深雪を望むに狐兵衛深雪が身の代を五十兩より負じと言張れども砂吉中々合點せずもこれよし有欠落者なり強て苦界に沈めんと朝せば自害もしかならず然すれば資本の損とならんと此掛合に枝葉つきて既破談にもなるべきを肝煎ども色々扱ひしが畏ぬけが婆やば晝小支那と深雪が私語あひし事を立聞し直に兩吉が論の座に走り行て様子を告げるゝ鬼をも欺く砂の吉是に付込み三十兩買落し扱件の狂言を書き態と持へ事して空念佛を唱へてしかせしなり素此砂吉は夫あり子ある中をさへ買取り種々悪計を廻らし如何なる女よても苦界に陥るゝの老賊なれば斯る作り事して深雪が必死を救ひ恩を着せ義理よつめて苦界へ沈めんと巧みしものなり深雪は斯とは夢も知らず世に慈悲善根の種を蒔く後生願も有ものかと思ひの外彼が家の体を見れば實に思所と思しくて數多の傾城共聲を献じ笑ふ故遊客入集ひて最賑ひし深雪は見るより胸潰れ身の不仕合を歎き幾度となく死路を求めしかど左に右は小支那が戒を守り生は難しと思ひ差込つかへを押へける砂吉の妻のれ六と圖り何か遣手に私語けばやりての香込み深雪に向ひ主が其死を助け多くの金を費せし恩義の程を口説き夫を償ふ爲半年が一年斗りもつどめよ出られし幸ひ金持の年寄客よ水揚の事を約せし事迄語り種々すかしけれども深雪は思ひ聞入れずして言るやう夫は心得ぬ事かな一命を助けられたるは慈悲ある人の意どころ思ひ

つれさる事は聞さへ耳も穢なりとて取合ふけしきも有らざりけり

○第十四回

去ば遣手は深雪が情の強きを憎み座を立てまよしと告げれば吉兵衛大に怒り我若干の金子を費し買取り来りしは全く金箱にせんためなり開ぬとて其儘は濟さうかと遣手を叱りろれ早くさやつを赤裸にし思ふさ小刀針を立上杯といふを妻のお六は夫の程よすがり必すしもはやまり玉ふなまづ一霎時待玉へ彼娘は歴々の育と見ゆるをあながちに玉は舌噛切ても死兼まじき様子なり然ある時損に損を重ねる道理先い一度説諭玉へと漸々宥て已が居間へ深雪を呼寄せ見れば見る程其さまやさしく心恥かしきけひひぞしたりお六いふやう和女は今三十兩余の身の價となり玉へば夫を償ふ金のあらずは暫時苦界の勤めし玉はでは叶ふまじ然るを何とも思はでありけるころ心得ぬ遣手どもは鬼々しきものよて今和女に憂目を見せんと鈍くを漸く止めしがおぬしは如何なる人にてあるやと物やはらかに問ければ深雪答へていふ様妾はよしある者の娘なり譯ありて只一人夫を尋ねて登るもの其人か未だ枕はかさはさねと一度約せし上は水火を踏ども添逐んと思ひ悟れば如何に責給ふとも氷雪より潔白き此身を何ぞ汚すべき事先の夜縊れ死なば斯る憂纏き事は聞まじきに是の主の費のの一ツの心残りなりおまへ若佛心あらば何本主人の氣色を宥められ免して都へ登せて給へ尋る夫に會しうへは金は返し申さんさもあらば折角今瀬川の入江にて必死を救ひ給はり老功德も水に成りなまじ主人の厚き情をばいかで生涯忘れんと涙と共に振口説きければ流石はお六深雪が貞女を感じしうへ其言事道理なれば心よく承引て如何にもね

十七 心の中心いたはしくこそ思ひ侍れ我々斯るさもしき營業はなせどもまんざら人でなしに

もいはず夫の手前よきに執成ひはんと猶懇切に打語らふれ六は深雪が立たる跡にて吉兵衛と差向ひ色々利解をとき深雪が心意氣を語り彼娘は氣情のばげしき者にて一心懸に疑りて石にも成兼まじき貞女なれば強て追らば死を早むるといふものなり周防のせけんをとりて如何に立引すとも此方にも後ろ暗き事もあればわらだちて事はなりがたく彼娘は極

らめて歴々の娘ならん寧ろ籠を明けて放ち遣り尋る人に逢せなば金子は定めて返さるべしよし又萬一ツ間違ひたる時は私が四季のさう佛とせまい程に茲は一ばん私を立て免して還しやれといふに眇吉は素此事を熱せし名ある粹坊なれば小瀬川にて十夜戻りの狂言をなせし人を誑す狐鼠もむだ事とは成りたれども迎も此手でゆかぬ奴もし迫り殺しては何にもならぬ事なれば夫も至極の了簡也と一決して深雪を放し遣るに如しと心を在けて菩薩頭夫婦

日 侶俱さまくにもてなし幸ひ好き便船あるを聞出し船頭も知人にて憐なる者なれば是を頼みて深雪を浪花へ送り遣らんと萬事信くしく取賄ひぬ却説く宮城阿蘇次郎は故わりて駒

配 澤の家督を継ぎ次郎左衛門と改めたるに秋月が妻水青は勿論しかありしとは夢も知らぬ

深雪は船に乗り移り夜もすがら寐もやらず名たる播磨灘は五十里の大洋なるに傾しも秋

すき風烈しく往先は鳴戸のさし沙番出て波の山の如く起り船を揺上げゆり下しつ夫に深雪

は端然として顔色も變らで有けるうち高砂の浦も跡よし明石の瀬戸を過ぎ又越方のまのば

れて彌々其人の懐しく稍都の空の近づさけるぞ樂しき猶も水を送り山を迎へて浪花の浪へ

ぞ着よける斯て深雪は浪花を立出て難なく都へ漂りつきて嬉しさの餘り羨れ勢れも厭はず

町所は知らずして只宮城阿蘇次郎が宿と雲をつかむやうに尋ね索せども速くしるべくもな

ければ日の暮たるは是非もなく本斗町の旅店に宿りぬ素より路金の用意もわらざる故有程

の身の廻りを賣なして日々遣ひとし何れ阿蘇次郎に逢さへすれば如何ともならんと遂に

悉く賣盡せしぞ是非もなし漸くにして住所を下河原にて尋ねあてしかど今は在らぬ様子故

隣りの多葉粉屋にて問ひけるに成程隣家に宮城さんとて學問の師匠をなす人の在せしが何

朝 事の有けん俄に國へ下られたり其後は鎌倉に住み今は名高き人よ成て在せるよし或人より

傳へ聞しと聞て深雪はあつと叫びて倒れふし暫時氣も付さりければ是を見るより向ふ隣り

より人數多集まりて顔に水打杯しければ漸に蘇生りぬ人々煙草屋より其様子を開て哀を催

ほし種々にいたはりて扱は宮城氏よ由縁の人なるを宮城氏鎌倉に在るよし聞侍りぬ左も

あらば鎌倉へ下り給ひて對面あれ鎌倉といへば遙なる様なれども道中儘に十日餘りぞい

日 ふなり左ばかり心弱くしては一人族の程覺束なし氣を儘に持玉へと最懇切にいたはりける

何地の浦にも鬼はなけれどわけて都は人の心もやさしく彼の海道を行ば日の岡の峰なり夫

配 より山科といふところを経て大津といふ驛あり今日は未だ日も高ければ大津迄は行かるべ

しなんとと問ぬ事まで言けるに深雪の都人の心切なるを喜び頓て杖を扶けられてあけの坂

をたどり姥がふところを過行て程なく大坂山にぞ着にけり此處よりは湖水も少し見えて凄

一十七

へ着たれば戀人に會ふ事と是をのみ樂しみて幾千の艱苦をなせし其一人今のあらずして

二十七 東の空に在るを聞始と精力を落し行つ戻りつ猶豫ふ邊には關の清水も落葉一埋もれ神の檜垣はふ葛も色變りせし霜枯に折節入日の影残る向ふの山より北風吹おろして薄着の骨身に冷通れば惣身に粟粒れこりて慄へおの、さけるにぞ斯俄は寒邪一胃され息困しさい

ふばかりなく今は一步進む事能はず此一夜泣明しけるが曉方に風少し落て時雨のやうに降出るよまた一層の愁ひを増し泣々宮居の下まで行きて虫の息もつきあへずありけるが此朝朝驛の名主等用あつて通り過しが爰に倒れし人の泣聲草葉よよはる虫の音にまがへるを聞

付て立止り見れば乙女のやつれ果て身よ一枚の襦袢を纏ひ最慕なげなる有様なるに深く哀れを催し連の者どもに語りひ此病女は斯やつく成たれと爪はづれの賤しからぬは

いかさまよし有人の果ならん切もいたまじき事にわらずやと紙入より丸薬を取出し吞すれ

日 巴里人どもは熱き白粥など與へ名主は又里人に申付此所にわやしの小屋をしつらはせ葉の

庭を敷き稻巻などして臥たる上を掩ひ聊寒氣を凌せける往來の人も是を憐み一錢二錢を投

與へて過ぎけるとかや深雪は阿蘇次郎を慕ふあまり晝夜こがれて泣程に遂に兩眼泣潰れ今

記 蟬丸の因果を引俄に盲目となり果し哀れといふもれるかなり然るに一心の病毒目の中

に凝りかたまり半月才にして身は壯健よなりけれと他國にさそらへ刺へ膝入るばかりの小

屋に起臥せるなればいふせき事何に譬へん様もなし由縁の方よりとて言問ひおこす人もな

く故郷の記念とては空行月日のみなりしを夫さへ今は拜まれぬ盲目の身の悲しき夜なれ

どもぬば玉の闇路を迷ふまじびしと松風と谷の流れの響のみ耳に聞ゆて東なる人のみ思ふ

て居たりける或日また名主ども來りて深雪よ向ひ言るやう先日惱深かりしとさ熱うかさ

れうはここに早く鎌倉へ下りて我夫に逢たしと幾度か言はれたり夫は眞心にいやと問けれ

ば深雪は答へて聲かき曇り如何にも我夫は東の空よと聞からに尋ね逢んと走り來てあら

しや病に罹りて此道へ倒れふし幸なくも亦目の視ぬ身と成果ぬ然あれども命の限りは神

佛の恵を肩み邂逅はんと思ひ侍る若此儘一死果なば幽魂と成ても下らでは後すと言ふに名

主いふやう然あらば其所よは何ぞ覺はれたる藝はあらずや深雪は聞て打點頭わらはは三

朝味線を引侍と云ければ名主は己が心一驚へる思持にて宜々三味線をさへ引れなば鎌倉へ下

るよは能き便なりとて夫より驛中を廻り五文七文づゝ集頓て貳貫計になりよければ名主は

此錢をもつて一挺の三味線を求めて深雪よ與へいざ是を弾て何なりとも小唄をうたひうれ

をもて路費として段々鎌倉へ下られよと最深切に教ける此名主も亦得難き奇特者よぞわ

りける深雪は其情を深く喜び然らば此三味線を彈て東海道よ下らんと熱々おもふにわれ今

盲目となりたれば戀人に會ども極めて夫ども見認給はずさあらば朝顔の唄をうたふに如し

と抽はるるにしづみたる露のひぬ間の朝顔の萎める斗りやつれてし憂身を照らす日影さ

へ見る由もなき耻かしき涙まぎらそ春雨のほらくと調べる三味線もいとほしと妻戀ふ鹿

の啼音より哀れ合める聲音には聞人殊に感一堪へ霞に向ふ驚か迦陵頻伽も劣らじと首屈

ぐ程にもてはやされ惠の花の敷うひて今は繼々なれども新らしき布子を重ねて餘寒を凌ぐ

妻となりける斯て深雪が行先々の里人どもは深雪といへる名を知らねば只朝顔くくと云々

す程よ只これ朝顔の誓と呼なして街道筋に其名高くを聞ゆける深雪が行ける宿々は朝顔の

三十七 唄大に流行て犬打置はさらなり干菜ささむ飯盛も鬼殺しの雲助まで此唄を歌つる事晝夜の



六十七 別ちなく宿々是が爲め姦しかりけるとかや
○第十五回

切また爰に大内介多々羅満興殿へ此春幕府の御暇を賜はり本國周防の山口へ下らるゝ一
臣駒澤次郎左衛門御先供なるに依て番頭岩代瀧太同道よて殿より三日先に鎌倉を立出ける
行は程なく業平の中將が鹿の子斑とよませ給ひし富士の裾なる駿河の府中に着にける駒
澤今は家老格なれば其行列いと美々しく本陣よは駒澤が定紋の幕を張り關札高やか一建
支關前よは砂子高く盛わけ其邊水打ろゝぎ亭主は麻上下にて恭しく出迎ひ次郎左衛門座敷
に通り頓て亭主に目録をとりせ杯して風呂よ入り暫く湯氣をさましめてあたりを見るよ最
あらたなる小屏風に至極見事なる色紙を張交てありけるを讀下せば已れが宇治の盛持の船
よて深雪の扇子に書て遣りたる朝顔の唱歌よて有ければ駒澤深く不審しむ彼舟に伴ひし者
ならて知る由もなき此唱歌誰が水莖の跡かは知らねと爰にて見んとは兎も角よ心濟されば
と手を打ち下女を呼寄せ彼色紙を指し是は何人の書たるか其方は知らずやと問ひければ
配女答て此屏風は近頃出来いたせしよて夫なる文字は朝顔の流行唄なるよし爰の子達の師匠
より書て呉しと主人に譯を承はりの鎌倉には未だ朝顔の唄はやり申さずやと、らの宿々は
頃よ此唄をもてはやし侍るにといふ駒澤肩を擧めそは又如何なる故よ流行いたせしと怪
みけるに女いふやうされば其事は近頃朝顔といふ十七八計の美しき替が東よ尋る人の有と
て上方より下り來り其朝顔の唄を三味線よかけていと面白くうたひ侍る初は非人の如き風
情なりしが今は其藝の隆にてあちこちにてもてはやされ稍時めき猶此宿に止められて居侍

る殿よも召れて聞せ給はし呼すんと勸めける次郎左衛門は聞より胸騒ぎ何となく心よ答へ
けん然らば早く聞まやしと同宿の瀧太に向ひて是をはかるよ瀧太も一段の事と言けるよぞ
女に言付いと其替を招き來らしめて薄縁の上よ座らしむ盲女はみるぼらしげよ低頭して
禮をなすを駒澤燭臺の影にて只一目見て最驚きし体なるが替は調子を合せつゝ聞賣人の家
夫と神ならぬ身の知る由もなくあやとりをむる憂身にも虫が知すといふものならん只何と
朝なく打蕪れ自からなる涙聲よて

露のひぬまの朝顔を照す日かげのつれなきにわはれひと村雨のはらくと降れかし
とれし返し物悲しくもひき唱ふ夫の春雄は忍び目よ見れば見る程疑ひなき我妻なれば
いたはしや世に無き人と思ひしが斯くやつれて存命ありしか見し其時は花やかよなまめさ
つるが今は萎める朝顔の露をればたる憂なり我深く思ひ測らで元の名を告さりしは過なれ
日 我爲よ操を立て家を逃れて此處へ來り盲目と迄なりたるは哀慕につれたる業にやわらん可
愛の妹が心根やと骨身に答ふる悲しさよ耐兼てこぼす泪は泉の如く聲を吞込み泣顔を岩代
記に見られしと扇子を押當てそむかへば座にゐる人の鼻打かみて黙し居たり瀧太は一人強氣
の者替の方を見流してうたひやうの上手伊勢の海むしろ田よりは今めきて面白かりき今一
曲よ望みけるを次郎左衛門押止め纏頭を與て退せける瀧太は最不興氣に思ひければ
先つ方より胸打潰れて悲歎のあまり再び開き忍び兼て瀧太を止めしなり駒澤は夜更て人
の静まるを待て先の下女を招き子細あれば又も彼の朝顔とやらんを呼寄せ呉よと頼みけれ

七十七 ば心得て人を走らせけるに使歸りてやう朝顔は先程清水といふ在所の家に呼れ駕籠に乗

七りて参りたれば今宵は彼所泊るならんとの由を聞次郎左衛門深く望を失ひ人知れず歎き
八十八頃ひしが七ツ立の事なれば今宵は朝顔は逢ふ事の協はじと瀧太が手前なかりせば仕様もあ
らんと思へども今は何共詮術なく常は肌身を放さざりし妹が紀念の扇を取出し亭主を呼
と譯あれば此扇を宵の警し届て呉よとまた別一包の金子を添呉を頼みて渡しければ亭主
は是を受取りて二方の客をれくり未だ夜は明ねども又しも朝顔が宿に使を遣り頼て連歸ら
朝せんせし朝顔は何か隙をりて巳の下刻に漸々来り亭主に昨日の禮を述朝から呼給ふ
は何事にいといふに亭主いふやう別の事もあらず宵の御客の御頼にて是を和女遣は
し呉よと扇子と此金を残し置れたり其儘渡しければ朝顔は眉を蹙めては不審し故なき御
方より斯重なる金給ふべきと扇をひねりまはしてありけるが遽然しく且那此扇を見て給
はれ若や朝顔を畫き其傍に妾が常にうたふ唄の書てはあらざるやと云ふに主人は目鏡を掛
け其扇を開き見て成程云る如く一輪の朝顔の繪のひぬまが書てあると聞より朝顔覺
ぬすはつと大息吻に主は扇を返し視て朝顔どのまた何か書てあると朝顔彌々周章てよ
記寄ば亭主は扇を打見やり宮城阿蘇次郎事駒澤次郎左衛門と讀下せば扱は駒澤殿はもと宮城
と申せし人なるかと言も果ぬに朝顔は呆れまを思はず其處に伏し轉び人目も耻ず取乱
身は空蟬のぬけの如く何阿蘇次郎殿が駒澤次郎左衛門とや夫ころ我夫なれ南無三寶運か
りしいで此上は片時も早く追付んと足もろらぬ駈出すを主人は引留めて其様いらいら給ふ
な餘りに遽然急がれなば怪我もやすらん駒澤殿は七ツの立の事なれば迎も急には追付難し
殊に此大雨よいかで道もたどらるべき然れども是非行ふとなれば是を着てと簀笠渡せば

朝顔の添けなしと押頂き杖を頼に西の方へ急ぎける心は飛ぶ雨は益々降しきり恰も篠つ
く如く濡たる儘に大井川へたどりつけば悲しや大鼓打ならして只今川は止りぬと言ゆ
ぬ深雪は氣も疲れ足なへて身もよもあられず大内家の御家中駒澤次郎左衛門殿は如何と問
へば問屋場の者ども夫は今一時ばかり先に川を越したりといふに松道も萬の頼も絶は
て、覺えず足摺なして悔めども詮術なく聲を放ちて泣叫ふ利さへ笠をば川風に吹取られて
朝其所に倒れて臥しよける却て説く駒澤は道もがら川支もなく程なく都へ着にけり爰に大内
家の執政たる山岡玄蕃允秀門は岩代瀧太と謀し合せ駒澤が爲には戀の遺恨ある萩野祐仙を
顔も一味に語らひ密々判逆の金ありしが天は明々瞭々として奸臣の爲に傾ぶべき大内家な
らざるうへ老臣冷泉帶刀ありて加ふる忠臣無二の駒澤次郎左衛門君側にあれば遂に森臣
等が謀略の裏をかき其悪巧を見顯したれば大内殿も大いに悟る所ありて山岡岩代等を重
刑に處せしと有しを駒澤諫めて所置を寛典にしおのゝ死刑を免されければ皆惡念を断
へして大内の領分にて不毛の地を多く開拓し君家の爲に功を奏して恩徳に報ひしとかや其
記后駒澤次郎左衛門の加祿若手を賜はりて執政の列に加へられまも冷泉帶刀が推擧し據ばな
り爰に又福岡にては深雪が家出したたりしを四方へ手を分け追せけるが東海道金谷の驛にて
朝顔の警女と呼れりたるを探しあて更家引戻して段々の仔細を尋ね初めて駒澤次郎左
衛門が前名宮城阿蘇次郎たりし時深雪が言かはしたる事を覺りし又駒澤は國元へ着のう
九十七へ深雪が族中よ吟行ある事を父弓之助が許へ知らしめ更冷泉帶刀が媒妁して秋月の縁
談の事を筑前福岡へ掛合けるに弓之助も當時は立身して家老となり居たるにこれを悦び妻

八子に此由を聞せて帯刀が媒妁に任せ日を撰びて婚禮の式に美を盡し深雪を山口へ送るに深雪は浅香を介添として乳母眞柴をも侍づかせて姫君の屋敷へ入るに深雪は矢張盲目と思ひ居たるが関は規形式の如くものして愛度祝言調ひける春雄は是迄も深雪は矢張盲目と思ひ居たるが関に來り綿帽子をぬぎぬるを見るにこはいかに目は艶々して水晶の如くなれば前方宇治にて見しよりいよいよなほ百倍も優りて雪の膚花の顔艶色勝れて恰も西施楊貴妃をも欺く手朝りなりければ春雄は喜びいと心ときめきて又しも関の盃取かはし深雪は嬉しく越方のつらかりし事も語り春雄は旅中よてやつれし形を見て只管いたはしく思ひくらし夫より後の事を更に知らねば案は相違し今深雪が目の明たるを不審り其故を問ふに深雪いふやう吾儕は君と會たさし産神を祈り朝々冷けき水にてこりをとりし故に自ら送上も下りしか心地爽に御神の恵よて両眼明き侍りぬと聞て春雄はますます感念今に初めぬ神慮の有けると語らふ内に夜も更ぬれば眞柴浅香は緑の帳をおろして避け出るに夫婦は驚きの涙をうち固め驚をこらばし風を倒し水もらさじと契りける斯て深雪は室津なるお六が情を忘れず夫にばかり一人の使を遣し其時の身の代の十倍なる金子をば吉兵衛にとらせ數の反物をお六へ送りて其志を表はしける深雪はまた己が納戸金を出し人を頼みて赤間が關なる遊女小支那が身を引しめ自ら媒酌して良家の婦となさしめしむ昔舊恩を忘れぬゆゑなり深雪は其後男女の子夥多設けたるにぞ次男は眞弓之助に遣りし家督を繼しむ斯て或年鎌倉殿より駒澤が大才ある事を聞き召れて御直參に召仕るべきとの御奉書なり大内介滿興朝臣台命を畏み其日次郎左衛門を召し其趣きを仰せ渡し給へば駒澤有がたしと御受上書主一名殘を願ひ

ければ介殿御開濟あり彼が知行三千石を同家の群一に給はり素の持高合せて三千五百石とし番頭にぞ命ぞられける是則ち駒澤が功勞の報と成りて是より次郎左衛門は元の姓をなほ宮城次郎左衛門春雄と改めはるく鎌倉指して不立出ける與方深雪は大洋の宿に泊りて名主百姓どもを呼出し品々の物と興へて彼等が好意を謝しまた海道一筋の所々よて世話をなしたる者共に程々の物をとらせけり斯て日ならず鎌倉に至りて程なく召出され御目見を朝なしけるに君は満足せりとの上意あらせ給ひて即座に五千石餘の知行を賜はり左衛門尉になされける是より宮城左衛門尉と稱しけるも本國對地を立退たる時の素志を遂たるなり春雄が御膝元よりありて忠を盡したる勳功の枚擧し違わらざれば略して記さず後より春雄熱を思ふより功成り名遂て身退くは天の道なりと一通の願書を持け強て御暇を乞て首尾よく隠居を免されければ春雄は君恩を謝し妻深雪と俱に故郷なる筑紫湯へ立歸り嫡子春雄家督して其餘の男女も都て歴々へ片付たる故今遠行に臨んでも些の心残もあらざりけり春雄夫婦は肥後の境に入りければ今の國主菊地典麻とすは故殿の御曹子なるが鎌倉に參勤せられて在府の時門弟のちなみありければ己が下向を聞せられ其變態に遇ふ事を厭ひ異様に身をやつして通り終り阿蘇が嶺に登りて浮世の人の尋ね來ぬ奥深なる地裡を見立草の家を結び猿鶴を友として茲に天壽を養ひ其終る處を知ずと言は定に芽出度御家の跡地の不測の奇遇と謂べき而已

明治二十三年二月七日印刷
同年二月十三日出版

發行者 日吉堂 菅谷與吉

印刷者 龍雲堂 大場沃美

神田區佐久間町壹丁目九番地
神田區柳原河岸町拾壹號地

大賣捌所

上田屋榮三郎	金櫻堂
大川屋錠吉	井上勝五郎
辻岡屋文助	明進堂
山口屋藤兵衛	近江屋園吉
春陽堂	大黒屋平吉
共和書店	木屋宗次郎
神田區田代町九番地	日吉堂支吉

